

常州着	四、〇九	八九哩	一弗八十錢
無錫着	四、五九	一一三哩	二弗三十錢
蘇州着	五、五四	一四〇哩	二弗八十錢
上海着	七、三五	一九三哩	四 弗

汽車は流石に廣軌(四呎八吋半、我國のは三呎六吋)であるから、立派なものである。列車内の容積は殆んど我汽車の二倍である。故に歸朝して始めて我國の汽車に乗りし時は、箱に詰められる様に思はれた。二等室に就て説明すれば中央を縦に通路ありて、左右に造附の卓子あり、二人宛相對して腰掛くる様になつて居る。一等室はその寄掛りが極めて大きくて奇觀である。二等室は此卓子がない。而して腰掛が板張である。進行中に此縦の道を汽車内の食物や湯茶を賣る者が通行するのである。又湯に浸して搾りたるタオルを貸し與ふ。これは半時間位おきに持ち來るので、顔や手を拭へば清涼を感ず。最後に一回一錢位の割合で錢を與ふるのである。

汽車中で甚だしく感じたる事は、支那人の飲食の慾にきたない事である。支那人に三大慾がある。色慾と飲食の慾と金錢慾である。金錢慾の盛なる事は既に屢述べた。非常に勤勉で、金を得ても之を婦人に投じて惜まぬのが常で、姦など、毎月五六百圓位の收入のものは澤山あるといふ事である。飲食の慾の烈しい事は今日見た。二等客は中等以上の人であらう。故に高尚なる考を有すべき階級のものであるのに、新聞を讀む者は十人に一人もない。殆んど悉皆の者が洋食を誂へ、酒を飲むので、八十里許の旅に絶えず口を動かして居る。あまりと謂へば感覺的である。彼等には美を愛するといふ思想も極めて幼稚劣等で、家の内外の裝飾など不調和で笑ふべきものである。眞理を愛するといふ思想も薄くて、唯傳説的である。善を愛するといふ事も通常以上ではない。此の八十里間の飲食中、果して何を話して居たか了解することは出来なかつたが、健啖には驚いた。人は食ふために生れて來たと觀念して居るらしい。予は車中で二三の支那新聞を買つて見て、始めて本國に大洪水のあつたのを

知つた。東京附近の十三日、十四日頃の慘狀が出て居つた。蓋し上海東京間の郵便到着の最短期限は四日である。(漢口は七日)故に丁度此日の新聞に出たのである。新聞を通覧するに、日本に關する記事論説が殆んど半分を占て居る。これは一は新聞社が小規模であるから、支那國內の材料を得るに難く、爲に日本の記事を其儘に轉載すると、一は日本の勢力が可なりに行はれて居るを證するに足るであらう。その一新聞の社論は「韓國合併の風説」といふのであつた。(合併發表は八月二十七日)韓國はもと支那の屬邦たりと説き起して悲憤慷慨の筆を振つて居つた。而して「東洋の大洪水」の記事は面白い。始めに「本年はハレー彗星が出たから、世界何れの國か其禍に罹るに相違ないと思つて居つた處が、日本が其禍を受けた」と起して二段許日本各地の被害の模様を記し、町村名まで委しく載せてあつた。而してその結句が面白い。曰く「世界國多し。而して日本獨り災害を受けしは何故ぞや。蓋し日本は奸邪なる國である。嚮には日俄協約を以て滿洲の利權を收め、今又韓國を合併すとの風説がある。天の日本

に災する亦宜ならずや」といふ筋であつた。清國人には左様に感ぜらるゝかと考へた。而して其他には大隈伯の談話、その他日本に起れる記事が澤山あつて意外に感じた。

吳 船 錄 南 宋 范 至 能 成 大 著

吳船錄一名出蜀記は、淳熙四年(皇紀一八三七、治承元)の紀行に係る。その一部を抜萃す。

八月癸未。泊鄂州(武昌)南樓。月色如昨夜。

己丑。解維小泊漢口。漢水自北岸出。清碧可鑑。其行緩故得澄瑩。大江如激箭。萬里奔流。不復得瀾濁也。

庚寅。辰時過赤壁。泊黃州臨臯亭下。赤土山也。未見所謂亂石穿空及巖奔嶽竒之境。東坡詞賦微夸焉。

癸巳。至江川(九江)泊琵琶亭。通判呂勝已隸書琵琶行刻石左方。

乙未。早出南門。遊廬山。去城百三十里至太平興國宮。在聖治峯下。左則香爐石頂諸峯。右則獅子遊華諸峯。面對廬黃諸山。形勝之地也。入山五里至東林寺。寺東北隅有作白樂天草堂。樂天元元和十年爲州司馬。作堂香爐峯北遺愛寺南。往來遊處焉。後興寺並廢。今所作非元和故

處也。廬山雖ノ號ニ九屏ニ然其實不ニ甚深。山行皆繞ニ大峯之足。遠望只一獨山也。比ニ他山爲ニ最高。雲繞ニ山腹ニ則雨。雲騎ニ山頂ニ則晴。

戊戌。巳時發ニ江州。回ニ望廬山。漸東而高。不ニ復遙邇之狀。過ニ湖口ニ望ニ大孤。如ニ道士冠ニ立碧波萬頃中。亦奇觀也。

己亥。東望ニ小孤ニ如ニ文炷。澎浪磯在ニ其南。風起波作。

甲辰。至ニ池州ニ泊ニ望淮亭。

甲寅。泊ニ建康。(南京)丙辰發ニ建康。

庚申。泊ニ鎮江。

冬十月己巳。晚入ニ盤門。(蘇州)

第十三章 蘇州概説 (Su-chau)

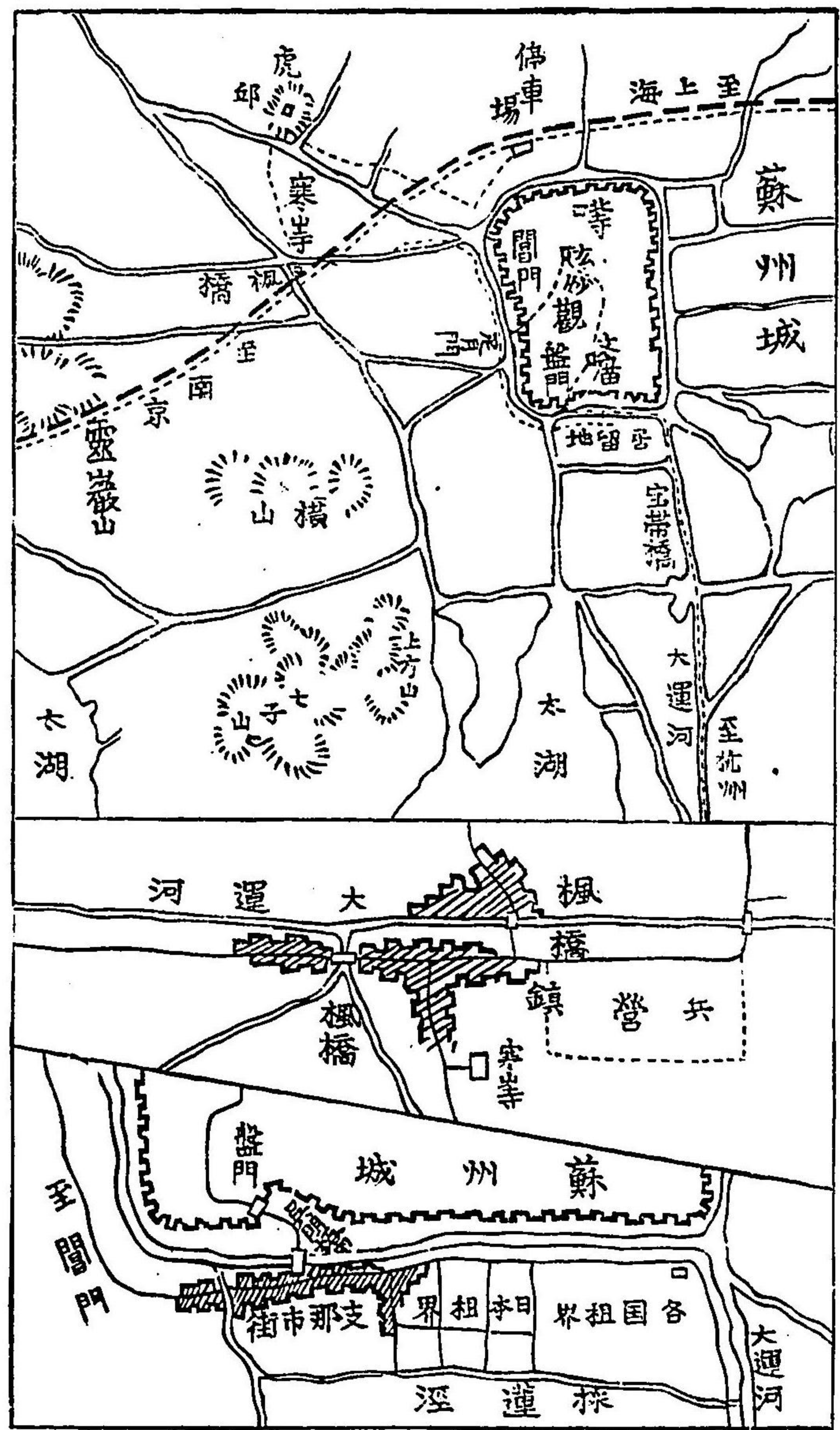
停車場の花 快活なる英國婦人 蘇州の大觀 吳の歴史 西施
孫子 天下の霸府 城郭の構造 長髮賊 蘇州の産物 日本品
日本居留民 南船の本場 太湖の景 館娃宮址 姑蘇臺址 上方
山の古塔

上海停車場

停車場の花

快活なる英國婦人

八月十八日朝、腕車にて上海停車場に急いだ。蘇州迄の切符を買つて七時四十五分發の列車に乗込まんとすれば、美しき日本令嬢が、プラットホームにありて予に敬禮した。車中の西洋婦人を指して語るには「此婦人は英國人です。南京に居る旦那様の所に往くのですから、御同伴を願ひます」といふ。之れは近頃以て迷惑なるお役目。予は「私は蘇州まで往くのですか」といふ中に汽笛は鳴る。予は飛乗る。汽車は進行を始める。見れば二十四五歳の純白装婦人。英語で簡単に挨拶した。やがて夫人は濫い日本語で話を始めた。東京に居た事があるといふ。夫人はなかく、快活で、多辯で、頻りに南京、漢口等に於ける英國人の勢力など問ふ。流石に英人であると感心した。やがて問ひもせぬに「母は朝鮮人です」と語つて、又己の名をいふ。かくて予はその父は予が嘗て名をきける有名なる宣教師なる事を想ひ起した。「夫君は南京の何處に居りますか」といへば「知りませぬ唯英國領事館に參つて聴きます」といふ。「南京へ參つた事がありますか」と問へば「ありませぬ」といふ。甚だ大膽なる事と思つた。



蘇州の大観

「それにしては今日は暮れます。予が泊せし旅館東和洋行へ泊る事にしたらよからう。又その番頭も南京停車場に出迎に來て居ます」として紹介状を與へたら大に喜んで居つた。平坦にして諸處に湖沼ある田野に村落斷續し、鷄鳴狗吠相聞こゆる間を通過すること二十八里。十時半蘇州停車場に降る。

蘇州は、上海を距ること二十八里。古の吳の都で、所謂姑蘇城である。本邦人には「姑蘇城外寒山寺」の詩で有名である。二千有餘年の大都會。今は江蘇巡撫の居る處で、一省の政治の中心である。氣候溫和、土地膏腴で、米や繭の産豊かに、住民は殷富。加ふるに風光が甚だよい。故に古來上有天堂、下有蘇杭」と唱へられて杭州と共に樂土の稱せられて居る。かく坐食逸樂するも猶生活し得らるゝが故に、古より文藝を尊崇し、今猶讀書人が多く、江南文華の中心と謂はる。されど風流文華に流れて剛毅の風がない。住民の風采は比較的高雅であるが、惜むらくは實學起らず。經濟の發展を見ず。天然の寶庫を空しく委棄するの觀がある。住民二十五萬。馬關條約の結果によりて、明治二十八年に開

いた貿易地で、本邦居留民百餘人。現在の有様は大に有望といふ事は出来ぬ。此地の名所舊蹟を語るに先ちて、その歴史の一端を説く必要がある。十八史略に。

吳姫姓。大伯仲雍之所封也。十九世至壽夢。始稱王。延陵季子(前出)

……壽夢後四君而至闔閭。舉伍員謀國事。員字子胥。楚人伍奢之子。奢

誅而奔吳。以吳兵入郢。

吳伐越。闔閭傷而死。子夫差立。子胥復事之。夫差志復讐。朝夕臥薪

中。出入使人呼曰。夫差而忘越人之殺而父邪。周敬王二十六年。夫差敗

越于夫椒。越王句踐以餘兵棲會稽山。請爲臣。妻爲妾。子胥言不可。

太宰伯嚭愛越路。說夫差赦越。

句踐反國。懸膽於坐臥。即仰膽嘗之。曰。女忘會稽之恥邪。舉國政屬大

夫種。而與范蠡治兵。事謀吳。太宰嚭譖子胥耻謀不用。怨望。夫差乃賜

子胥屬鏃之劍。子胥告其家人。曰。必樹吾墓。橫木爲材也。抉吾目懸東門。

以觀越兵之滅吳。乃自剄。夫差取其尸。盛以鸕夷。投之江。吳人憐之。立祠江上。命曰胥山。越十年生聚。十年教訓。周元王四年。越伐吳。吳三戰三北。夫差上姑蘇。亦請成於越。范蠡不可。夫差曰。吾無以見子胥。爲三幘冒乃死。

又史記の世家によれば「吳王夫差越を破る。越は美姬西施を進め、軍を退かんとことを請ふ。吳王之を許す。吳王は西施を得て甚だ之を寵し、爲に姑蘇臺を築く。高さ三百丈。その上に遊宴す。子胥諫めて曰く、臣姑蘇の久しからずして麋鹿の遊ぶ處とならんことを畏ると。後越に討たれて遂に焚かる」と書いてある。又史記孫武(兵家)の傳に、孫武、吳王闔閭に兵法を説く。吳王即ち後宮の美女を訓練すべきを命じた。孫子之を承り、美女百八十人を一隊とし、王の寵姫を隊長とし、鼓の相圖によりて一定の方向を見るべきを命じた。斯くして鼓を打ては美人等皆笑ふ。孫子曰く、兵に節度なきは隊長の責なりとて、王の哀求するを肯せずして之を斬つた。再度之をなせば皆よく規律に服した。即

ち兵を訓練し、遂に隣邦を被つて覇業を立てたる由が書いてある。有名な話である。孫武は孫子十三篇を書いた人である。

其後數多の變遷はあるが、主要なる事實は闔閭、夫差の二代である。所謂五覇の中ではないが、西彊楚を破り、北齊晉を威し、南越を服せしめ、一時武を以て天下の勢力を得たのである。その吳越の戦争は有名なるもので、臥薪嘗膽などいふ故事もこれから出たのである。時は恰も孔子の時代で、孔子誕生が皇紀百十一年。夫差が越を夫椒に破つたのが皇紀百六十七年。孔子が春秋を作つたのが百八十年。夫差が越王に滅ぼされたのが百八十九年である。二千四百年前の舊蹟であるが、懐古の情に堪へぬ。漢末黃巾の賊の頃に、戦亂の爲に甚しく荒廢したる様子は、次の李嘉祐の詩で明瞭である。その斯く人をして懐古の情を催さしむるは、その歴史にもよるが、後世詩家が之を詩題とした者が多いからである。

吳宮怨

衛 萬

君不見吳王宮闔臨江起。不捲珠簾見江水。曉氣晴來雙闕間。潮聲夜落千門裏。句踐城中非舊春。姑蘇臺下起黃塵。祇今惟有西江月。曾照吳王宮裏人。

自蘇臺至望亭驛人家盡空。

李嘉祐

南浦菰蒲覆白蘋。東吳黎庶逐黃巾。野棠自發空流水。江燕初歸不見人。遠樹依依如送客。平田渺渺獨傷春。那堪回首長洲苑。烽火年年報虜塵。

蘇州府城即姑蘇城は、略長方形で、周圍四里許、運河を回らし、城壁の高さ二丈八尺。厚一丈八尺、立派なるものである。伍子胥が闔閭土の命を奉じ、土を相し、水を嘗め、天に象り、地に法りて築きしもので、六門を有す。今の城壁は、清朝の始めに改築せしものである。其頃は城内家屋櫛比し、空地に乏しかりしより、熱鬧の巷には、街道の上にも架樓を作つたといふ程であつた

長髮賊

が、長髮賊に占據せられてより十餘年間戦亂の巷となり、文物兵火に罹り、住民は上海などに避け、滿目荒涼を極めたが、四隣の富源と交通機關の發達とは再び此地の商工業を發達せしめ、漸次舊觀を恢復しつつあるのである。然れども城内の北端及び東南端の如きは草茫々で、唯墳墓の地となつて居る。盛なるは中部と、西北なる閩門（征楚の大軍之より出でたりとて又破楚門といふ）の外にて、殊に閩門外は料理店、旅館、歡樂場相並び、歡聲晝夜を分たぬ有様である。人口は二十五萬といふが其位はあらう。然るに本邦の地理書には人口五十萬とある。それは六七十年前の數であらう。

蘇州の産物

蘇州の命脈は機業にある。杭州と共に彼南京の機業を大部奪つたのである。刺繡の立派なものが出る。支那人の服は皆無地である。故に刺繡は甚だ必要である。珠玉、朱檀、黒檀の指物なども出来る。製絲工場、電燈會社などの立派なるものもある。日本品の輸入は上海よりの複輸入であるから、領事館で調べてもわからない。市街を通つて目につく日本品は、蝙蝠傘と香水、石鹼、齒磨

日本品

日本居留民

粉等の化粧品である。日本人も百人許居るが、教師、官吏、醫師と寫眞師、料理店などである。實業方面に發展せる者は甚だ少い。日本租界は南門（即ち盤門）外にあつて、地面は廣い。各國居留地はその東に接して居る。共に甚發達しない。九分通りは草野である。他日を待つより外はない。待てば海路の日和もあるであらう。

南船の中心

門泊東吳萬里船

穹隆形の石橋

城外は一面の平地で、大連河西北より來つて外濠となり、南方杭州に通じ、大小の河溝之を交錯して、數大湖の水を融通し、水路四通發達して蛛網の如くである。所謂南船（北馬に對し）の本場で、上海、鎮江、杭州に通ずる運河の集點地である。市街を出づれば殆んど荷車の類はない。一家必らず一船を備ふといふ有様である。所謂「門泊東吳萬里船」の出づる處である。貨物の運送、引越等には、一舟を備ふといふ有様であるから、地名は多く何橋附近と呼ぶのである。數人で名所を尋ぬるならば、一畫舫を賃して珍羞を携へ行くも好記念であらう。橋梁は何れも穹隆形の石造である。即ちその大きい橋は目鏡の高さが

太湖の景

四五間あつて、橋上の道路の傾斜が、三十度即ち富士山の稍緩なる位の勾配であるから、馬などで越えるには大に注意を要する。
近郊の名勝としては先づ太湖がある。五湖又は震澤といふ。謠曲船辨慶に陶朱公(范蠡)の事を叙して「功成り名遂げて身退くは天の道と心得て、小船に棹さして五湖の遠島を樂しむ」とあるはこれである。長十八里幅十四里周圍八十里の大湖で、支那第三の大湖である。湖中に七十餘の島があつて、眺望は甚だよ
いが、蘇州城を距ること三四里で、丘へ登らなければ見えぬ。

虎邱

楓橋と寒山寺

館娃宮址

蘇州城の西北三十町に、虎邱といふ孤立せる丘陵があつて茲に高塔がある。
吳王闔閭の墓のある所である。城西二十餘町の處に唐の張繼の楓橋夜泊の詩を以て有名なる楓橋と寒山寺がある。又城西約三里に見ゆる肉瘦せたる山が靈巖山で、吳王の離宮たりし館娃宮址は山上にある。姪は美人といふ事である。琴臺とて、西施が琴を弾じた處と傳ふる處がある。靈巖寺があつて、その塔は遠方から見える。太湖を一望し得らるのである。

館娃宮畔千年寺。

水濶雲多客到稀。

聞説春來倍惆悵。

百華深處一僧歸。

姑蘇臺址

闔閭王が全國の民力を費して、九年にして成就せりと傳へらる高三百丈の姑蘇臺は、之に近き山上にあつたので、李白の有名なる詩に

舊苑荒臺楊柳新。

菱歌高唱不勝春。

只今惟有西江月。

曾照吳王宮裏人。

上方山の古塔

伍子胥の死を吳人が憐んで建てたる胥山の祠、夫差が越王を破りたる夫椒は其西にある。而して蘇州城の西南三里に七子山の一簇がある。其東に出でたる脈を上方山といふ。山上に七層の古塔があつて、蘇州近傍數里より望む事が出来る。太湖に枕み、眺望絶佳であるから、蘇州人士の遊覽する處である。姑蘇臺は茲であつたといふ説もある。

第十三章 蘇州見物

旅行の佳境 廬馬啞を乗す 啞先生の奇態 門標 虎邱 案内者
簇集 千人石 劍池 虎丘寺 謝禮 馬上の將軍 古都の荒廢 新式
軍隊 寒山寺 主住の贈詩 汚穢なる楓橋 西園 留園 閶門
外の繁華 馬子との折衝 地獄で佛 日本醫の勢力 日本租界の位
置及施設 發展の道 居留民の眞情 團體散步 城内見物 文廟
兒童し支那的 滄浪亭 蘇州中學堂參觀 捩罌 支妙觀 領事館
を訪ふ 汽船にて抗州に向ふ 寶帶橋 運河の航路 湖州 日本
語を使ふ猫

旅行の佳境

蘇州停車場に下れる孤客は、是より愈旅行の佳境に入るのであると喜んだ。楊子江沿岸に於ける旅行は、あまり便利を得過ぎた。是からは知人は一人もない。又案内者も頼むまいと覺悟した。身には洋服を着け、手には毛布とミルクと唐紙と筆記帳許である。飄々として飛ぶが如き輕装である。毛布は夜具、ミルクは飢の迫つた時、或は病氣に罹つた時の用意である。唐紙は碑を摺るためである。筆記帳には地名の發音を記入して置いた。斯くして停車場を出でんとす

廬馬啞を乗す

れば、車夫等は五六臺の車を并べ、行手を遮ぎつて乗車を勧めた。此頃は子も支那人の怯懦なるを知つたから、脇鐵砲を喰はせて其間を出づ。蘇州城は四五町の前にあつて、その間は水田。城中には北寺の大塔のみ高く見ゆ。廬馬屋ありて乗らんことを勧めた。予は西北二十餘町に聳えたる虎邱の塔を目かけて徒歩せんと思つて問道に入つた。三四町行けば東洋東洋と呼び止むる者があつた。顧みれば馬子が驢をつれて追ひ來たのである。急に乘る氣になつて飛び乗つた。馬子は遂に厄介な啞を乗せた。

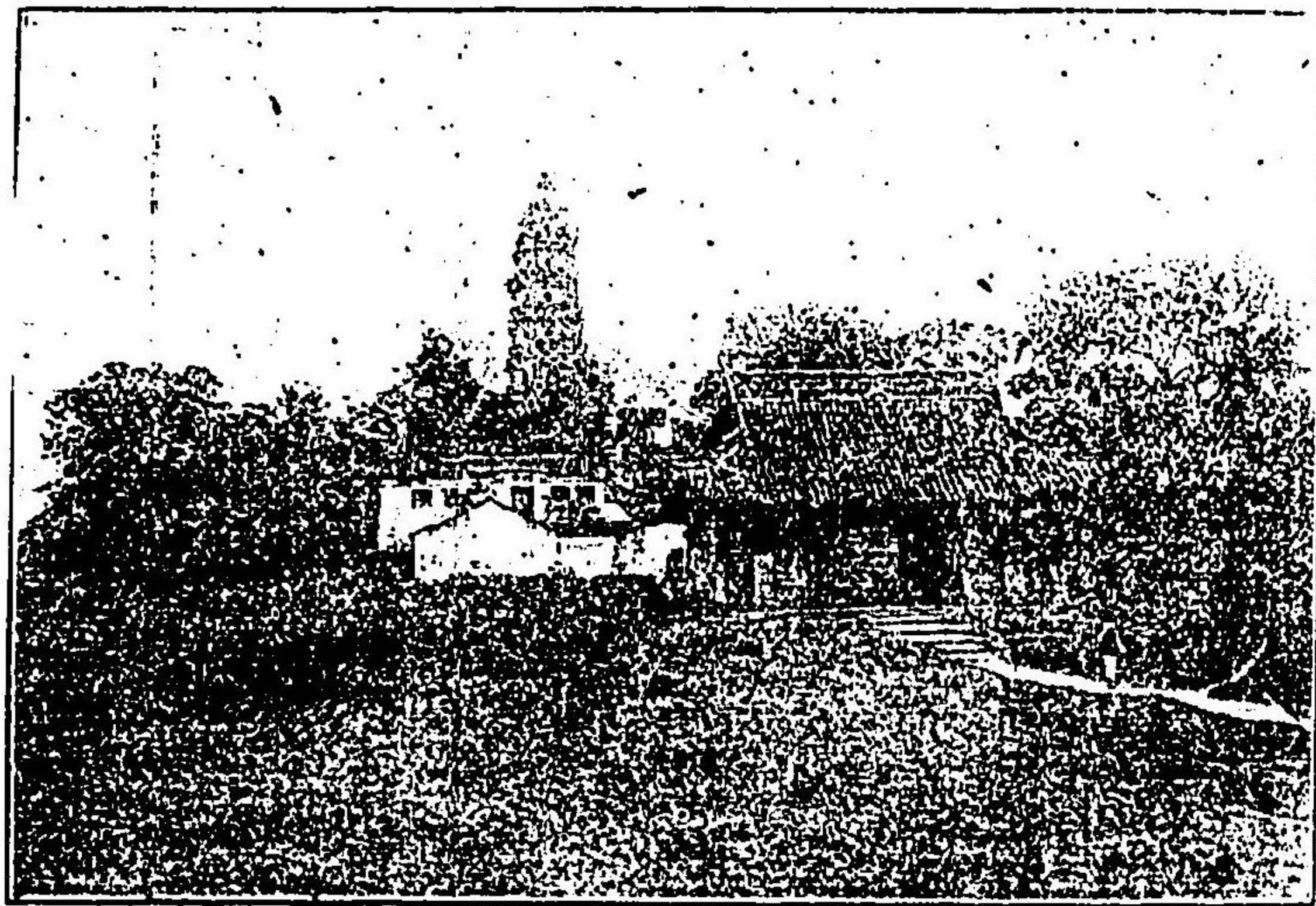
啞先生の奇態

我國では馬を追ふにシツシツといふが、彼國ではアツアツといふ。予も其氣になつてやつて見た。沼田の中の幅二尺許の細道を通る。これには切石が横に並べてある。而してぐらぐらする。啞先生ふるへながらアツアツとやる。やがて運河に架せる石橋を渡る。橋は三十度位の勾配がある。上る時はまだよいが、下る時にはその醜態見るに堪へぬ。墜ちさうになつて馬子が抑へて呉れた事もある。市街に入つて門標を見れば、累代進士、二代翰林など書いてある。流石

門標

に文學の地である。遂に虎邱に達した。之は徑四五町、高さ十四五間許の圓き丘陵である。

虎邱に着いて、山門外で馬を下るれば、其處に六七人の男が来て、予を遮つて頻りに何かいふ。予はこれは江の島の案内の様なものであらうと合點して、手真似で之を拒んで進んだ。彼等は予が前後に立ちて頻りに何か説明する。説明しても嘔であるから甚だ平氣である。路傍に割れたる石があつて、次に百坪餘の平面なる一大自然石のある處に出た。此大石の説明を聴きたくなつて、其中の衣服の稍よい男に筆談を始めた。之は千人石といふので、吳王闔閭が千人の臣下を坐せしめた處。彼割れたる石は、秦の始皇帝が茲に至りしに、吳王の靈が虎になつて路傍に臥し居たるを、始皇が斬りつけしに、虎は消へて石に刃が立つた。それより虎邱といふ」と記す。前面を見れば石壁があつて、顏真卿の虎邱、劍池の四大文字が石に刻まれてある。其後に劍池がある。巨巖の間に淋しく水が湛へてある。闔閭王を葬る時十萬人を發して墓を修め、金棺を茲に

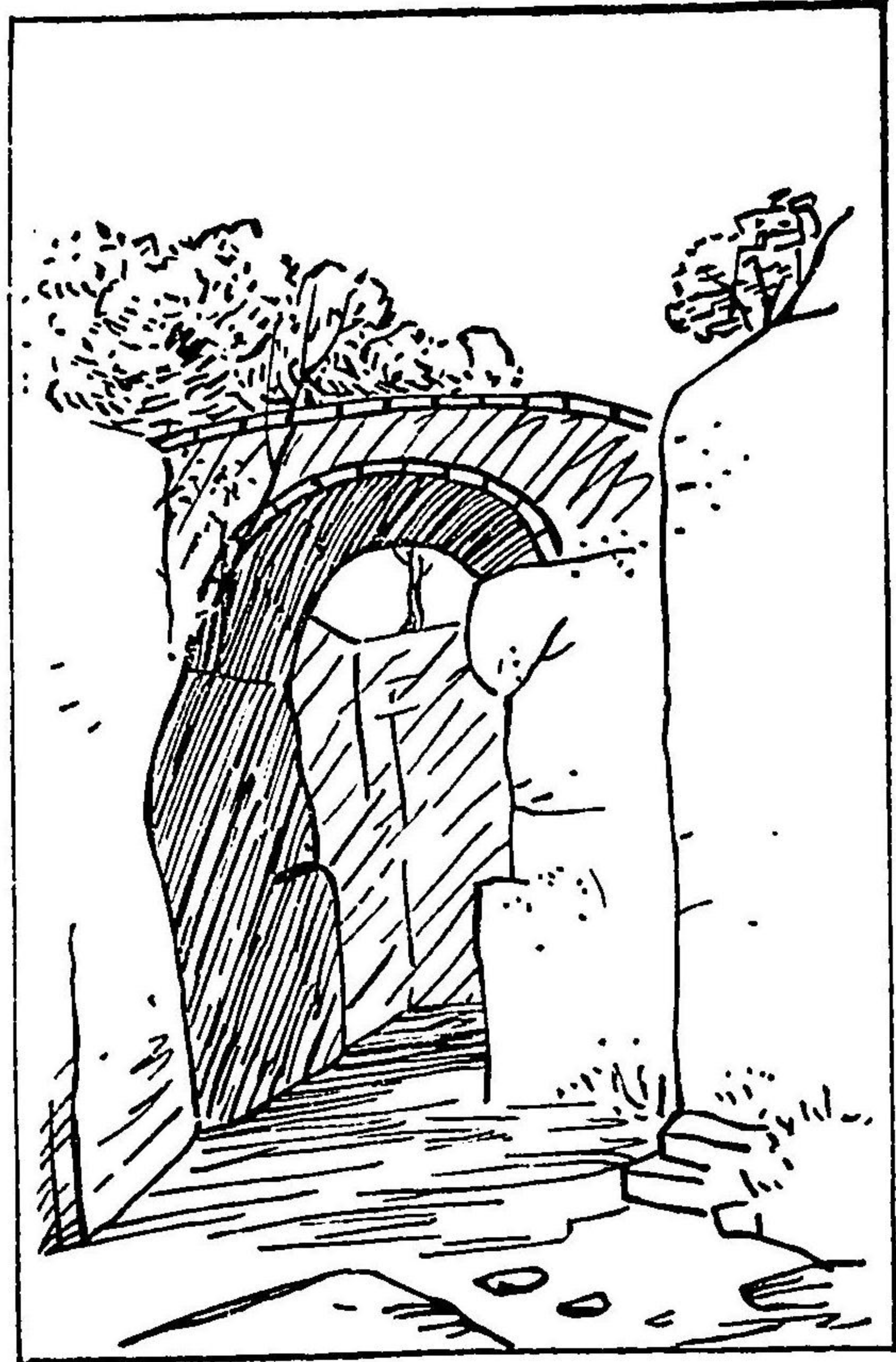


虎丘寺

沈めたと傳へられてある。之より左の方、塔の處に上らんとて荆棘の方面に進めば、一人の案内者は前に立ち荆棘を分けてトンネルの如くし、予が後には彼筆談者以下ぞろ／＼と来る。頼みもせぬに面白。又巨巖の間に水の湛へたる處に出た。鐵華岩と刻んであつた。高塔を一周して虎丘寺に參詣す。茲には日本の鐘がある。立派なる寺で、幽邃なる處である。かくして境内を七八町縦隊で歩んで、再び山門の處に出た。扱て彼等

案内者への謝禮

に謝禮をしなくてはならぬ。一回強請るに相違ない。如何にせんかと考へて、



池 劍

先づ銀貨三筒を彼筆談した男に與へて見た。意外にも彼は之を拒んだ。そこで二筒を彼刺し、藪をわけてくれた男に

與へた。他の四五人皆手を出せば、彼筆談した男は大に之を叱るのである。大分強請られるかと思つたのには安心した。即ちその邊に居る十人許の乞

軍馬上の將

古都の荒

新式軍隊

食に一仙宛與へた。かくて大に彼男に感謝し、名を問へば張梓亭といふ。別を告げて驢に跨り、悠然として顧盼すれば、案内者乞食等皆門外に二列となり、彼張梓亭が右翼に立ちて舉手注目禮を行ひ居るにはビックリした。予も奮發して舉手の禮として出懸けた一齣は、たしかに拍手喝采に價すると思つた。後に考ふれば、彼は日本軍人に訓練されたる士官ではあるまいかと思つた。

寒山寺を指して飄々として進む。此間は彼長髮賊の亂に荒れたる處と見えて殘礎空しく叢の間に出没し、或は千年も経たりと思はるる意味ある石門など空野に立つて居る。轉た懷舊の情に堪へなかつた。途中から書生らしき男がついて來た。「一同到寒山寺去」と書いて出した。一處に寒山寺に行かうといふ意味である。運河を渡つて楓橋鎮に出た。茲に旅團の兵營がある。大砲の操練などうまいものである。辮髪を下げて居るだけが我兵と異なるのである。カーキ色の服で日本兵と甚よく似て居る。唯路傍で小便したり、雨傘を抱へて歩む處（是は返しに行くならん）など聊異なるのみである。

寒山寺

楓橋鎮は姑蘇城外二十餘町の一聚落である。本街道と岐れて南に三町許入れば、其處に唐の張繼の楓橋夜泊の詩を以て有名なる寒山寺がある。

楓橋夜泊

張繼

月落烏啼霜滿天。

江楓漁火對愁眠。

姑蘇城外寒山寺。

夜半鐘聲到客船。

重泊楓橋

同

白髮重來一夢中。

青山不改舊時容。

烏啼月落寒山寺。

客枕依然半夜鐘。

日本人に有名なる寒山寺

唐詩選は支那ではあまり行はれぬが、我國に於ては極めてよく傳播して居る。而して口調のよいためか月落の詩は人口に膾炙して居る。支那人は、蘇州へ日本人が來れば必らず寒山寺へ行くものと思つて居る。儲その有名なる寒山寺といふは、昔は盛なる時代もありし山なるが、今は荒廢して小さき本堂と庫裏、その他一佛堂があつて、傍に鐘が吊され、内庭に文衡山(文徵明)と俞樾の筆の

寒山寺住の贈詩

正是湖南
殘學士
呼窓眠
北窓馬
細光域
觀往武
神往昌
漢口龍
丸山川



(庭なるな橋、角堂中鐘あり)

一 月落の詩が刻んである。芭蕉など生ひ茂つて一寸趣がある。茶を喫し居れば、寒山寺住持出で來つて筆談を始めた。勸進帳を持出したから相當の寄附をした。寄附者は皆日本人である。吉野櫻一對も領事から寄附されてある。此四日に廣島高等師範學校學生も來たといふ事であつた。此寺に到れば、故郷に歸つた様な心持がして、頻りに住僧と筆談した。住僧詩を贈つて曰く。
東國詩人叩鐘去。綠樹青山正繫船。

以贈

東國師範大學士德政

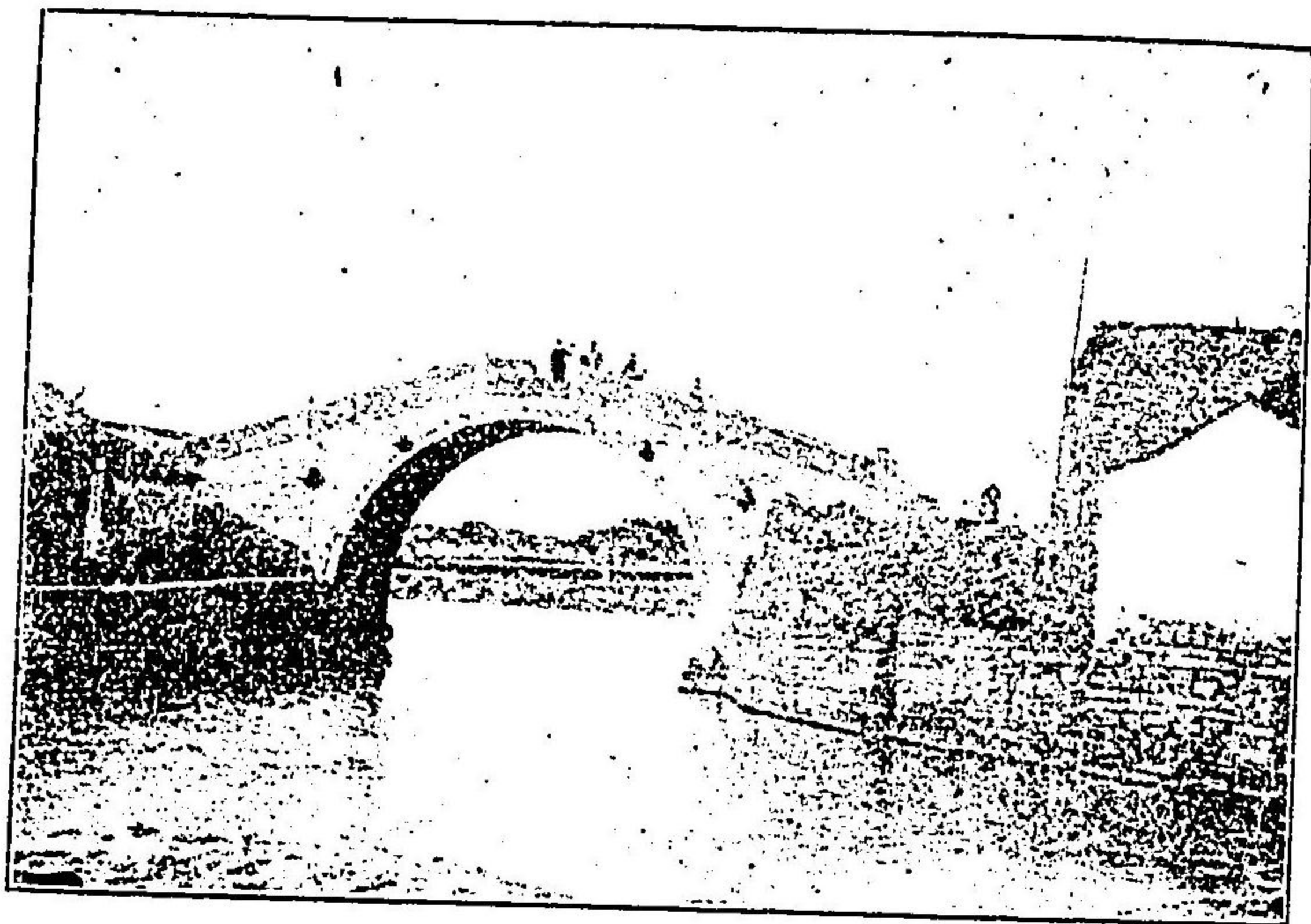
といふのである。宛名など振つて居る。人を見れば詩人だなどと面白い。月落の詩の韻である。(欄外の詩も然り)碑の石摺を買ひ、又自ら摺つた。文微明の碑は文字が過半不明である。その後我國の某僧、伊藤公爵の撰文を刻める鐘を鑄、之を彼寺に吊すといふ事であつた。

汚穢なる
楓橋

次に楓橋を見た。之は長十二三間の穹隆状の石橋で、大運河より支れたる小運河の口にある。街家密接の間に架せられ、橋の西端は支那人得意の放尿で、悪臭鼻を衝く、張繼先生此橋下に夜泊して彼詩が出来たのである。此陋巷を詩化せしを思へば、詩人の力量は驚くべきものである。驢に跨り歸らんとすれば彼虎邱より附き来りし青年が、錢を呉れといふのである。これは案外であつたが、爲に多少の便宜を得たから銀貨二つ與へた。之より運河に沿ふて蘇州城に向ひ、西園を見、次に盛宣懷の留園を見た。觀覽料は各十錢である。奇形の木

西園、留

閶門外の
繁華



(前手の右は寺山寒)

楓 橋

石を集めて庭園を作り、亭榭を築いたもので、蘇州の紳士淑女が車で乗り込む者が多かつた。

遂に城西、閶門に出た。茲は蘇州第一繁華の地、旅館、料理店、青樓などの大なるものがある。蘇臺旅館は目に着く旅館、例の茶館には人が充ちて居る。車馬絡繹の中を悠々驢に騎つて進むのである。稍静かなる市街に入れば、馬子は予を仰いて何か言ふ。降りて呉れと言ふらしい。予は日本居留地迄乗つて行かうと思つた。彼は斯くされては慣れたる日

本人に賃錢をよい程に宛がはれるから、茲で下ろして食るのが良策と思つたらしい。予はその手は食はぬと考ふれば、彼も其手は食はぬと考へて居るらしい。予は彼の言ふことを拒めば、彼は轡を執つて漫々と歩く。予は鞭を以て驢の臀を打てば、驢はどかくと駈け出す。彼は轡を握るといふ様になつた。巡査が居た。之を招いたら來た。「吳門橋日本居留地」といへば、巡査はその方向を指す。馬子は巡査がこわいから歩るき出す。又速度が鈍くなる。驢の尻をうつ。巡査を招く。歩るき出すといふ事を繰返すのである。而して馬子は予が手帳に三十里と書いた。(我五里) そんな事にはだまされない。畏れはせぬがいつも群衆が二三十人位集る。これには聊閉口した。遂に根氣負けがした。即ち驢を飛びおりて彼に賃錢を與へた。時間は六時間、路程は三里に足らぬ。故に通常六七十錢と思つたが一弗與へた。彼は之では足らぬと推し返す。傍に居る書生が英語で「二弗を請求する」といふ。知らぬ振りをして立ら去れば、驢を放置して追ひ來る。巡査を見れば逃げる。あまり面倒だから二十錢與へた。

彼も此時は喜ばしそくに挨拶す。年齢三十歳位の正直さうな男であつたが、支那人根性で甚閉口した。彼は日を指して「日が低くなつたから急いで行かれよ」といふらしい手真似をする。幌馬車は來つて二弗で行かんといふ。兒童五六人は手に附いて來る。甚ボンチ的であつた。

一二町進めば、兒童は傍の大いなる家を指して東洋東洋といふ。見れば「回春院」とある。どうやら日本の名である。地獄で佛に遇つた様に思はれて飛び入つた。これは榊谷治三吉氏の病院。氏は五十歳位の醫師である。受附の日本人と鼎坐して相語るといふ事になつた。久振りの日本語の御馳走。側に患者たる妙齡の支那婦人等が不思議さうな顔をして見て居つた。榊谷氏の語る處によれば、當地の日本醫師三名、皆成功に向つて居る。支那醫は信用なく、西洋醫は専門家ではない。唯宣教師が藥を盛る位のものであるといふ事であつた。榊谷氏は、今は警察へも軍隊へも入るのである。江蘇省巡撫も日本醫にかかるといふ有様であるから、日本醫の信用はわかる。かく醫は頗る有望であるが、始

め暫らくは、施療をやらなければならぬ。それは支那人は、賣藥や禁厭祈禱ですまして居るから、之を引つけるまで骨が折れるといふ事である。醫師たるもの大に往くべしである。

一時間許語つて日没に近くなつたから、腕車で日本租界に向つた。行程三十町許である。或詩に「閩門過去盤門路、一樹垂楊一畫樓」とあるが如く、人家斷續して面白い景がある。胥門外には汚穢なる青樓數十軒を並べ、十四五歳の少女の行人の袖を引くなど見る。城濠に沿ふて直角に折るれば、盤門外に吳門橋がある。茲に數百戸の市街があつて、續きて日本租界がある。その關口旅館といふに入る。

蘇州に於ける居留地に、日本租界と共同租界がある。蘇州城の南門外にあつて、大運河に沿ふて居る。その吳門橋外の地を洋務局租界といふ。これは商業會議所の様なものの所有地で、繁盛なる場所である。製絲場、汽船發着所などがある。日本租界はその東に接して地積約十餘萬坪。普通に二馬路といふ。北

胥門外

日本租界の位置

日本租界の施設

は城外を通せる大運河に臨み、東は各國共同居留地に接し、南は曾て吳王が美姬をして採蓮せしめたといふ採蓮潭といふ堀に臨んで居る。馬關條約に由つて此地が貿易地となるや、我國は戰勝の勢で茲に莫大なる專管居留地を占めたのである。各國租界はその東に接して九萬坪を有す。

稍詳に説明するならば、日本租界は運河に沿ふて八町許、奥行三四町ある。嘗て帝國議會に於て、その荒蕪に委せしことが問題となつて、幾萬圓といふ金をかけて立派なる街路を縦横に通じ、花崗石で壘みたる排水溝など作り、數百株の吉野櫻を植ゑ、柳櫻をこぎませたる居留地を作つたのである。然るに驚くべし日本租界には人家が洋務局地界に隣つて僅に二十戸許。過半は支那人が住んで居る。日本領事館、日本郵便局、旅館兼料理の月廼家、關口旅館、中村旅館、日本商品陳列所(村山氏經營)等八戸ある。蘇州の日本居留民は百餘人であるが、教師、軍人、醫師、寫眞師などは多くは此租界に居らぬ。將來租界を發達せしむるには、(一)蘇州商工業の發達(二)租界に工場を設くること(三)取締を寛にし

四十二年
末八十六
男八十六
女四十人

發展の道

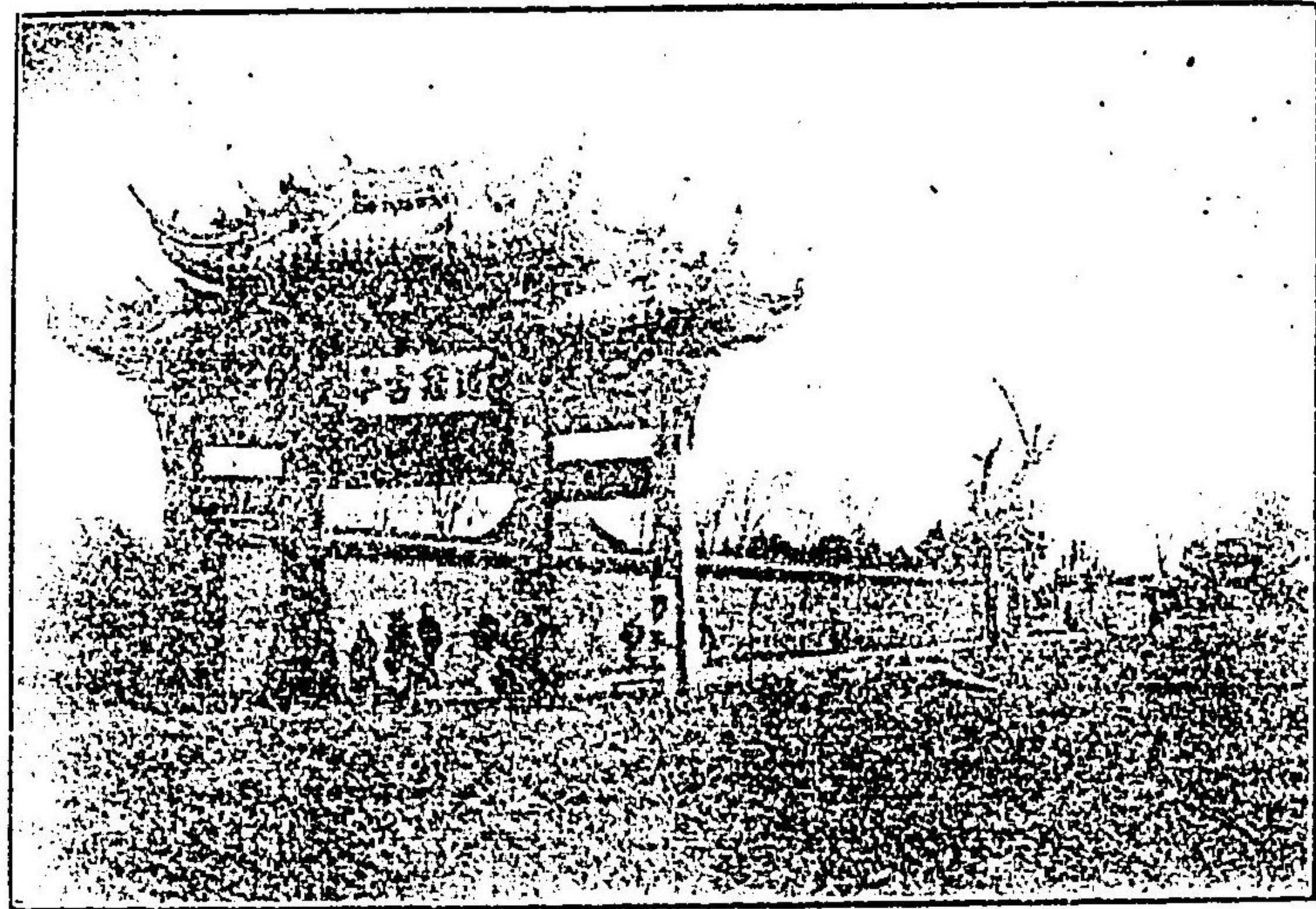
て西隣の繁華を次第に傳播せしむること(四)蘇州城内より直ちに日本租界に通ずる城門を開くこと等であらう。今の有様では寔に遺憾千萬である。

關口旅館の階上に居れば、下へは近所の者が話しに来るらしい。「今晚のお客様は何縣人ですか」など問ふ聲が聞こえる。海外萬里に居る人の情は然るべきものと思つて下り行けば、男女七八人が置縁に腰かけて居る。直ちに數年來の知己の様になつて語る。彼等は頻りに本國の様子をさくのである。九州人が多い。考ふれば今夜は陰曆七月十四夜、故郷では先祖の聖靈が來て居る日である。支那人も僧侶など請じて頻りに拜んで居る。これは日本と同一と見える。一天晴れ互り、明月皎々として晝の如く、大きな螢は飛び來つて運河の岸なる柳の絲に懸るのである。散歩の提議をすれば一同大賛成。一旦家に歸つて戸締をし、て來る夫婦もある。日本租界を一周せんとて先づ運河に沿ひて進み、次に中に入る。四五間幅の砂利道で、其街路を花崗石で疊みたるなど、日本の都會にも珍らしい位である。それで草茫々……仰いて城郭を見れば、子胥が「吾目を抉

つて東門に懸けよ。以て越兵の吳を滅ぼすを見ん」とて憤死した事が猶昨日の様に思はれた。涼風に吹かれながら、採蓮涇の蓮の葉に宿れる滴を見つめ、想を二千四百年の昔に馳せしなど、永く忘れられぬ印象である。

明くれば八月十九日。早朝旅館を出でて又啞の旅行を始めた。先づ城内を見んものと、吳門橋を渡つて盤門より入つた。城門は朝は五時に開いて、夜は十時に鎖すのである。二三町にして草茫々たる原に出づれば、茲に七層の一破塔がある。瑞光寺の塔といふ。昔は塔上に點燈すれば、太湖の漁がなかつたといふ。名古屋城の金の鯨鯨の話に似て大袈裟である。三四町で孔子の廟に着いた。茲で驢に騎つたる二人の日本の遊覽者に遇つた。

蘇州は文學の淵藪で、其處に孔子廟(文廟)がありとすれば、その壯大なるべきは言はずもがなである。實際を見ても規模は大きい。境域は一萬餘坪。南門外に東西二町許を隔てて異様な門がある。東門に「德參天地」西門に「道冠古今」と題す。南門より大成殿までの二三の門は皆鎖され、庭は一面に竹藪となり、



狐狸の巢窟となつて居る。巡查に尋ねて側門より入り、ぐるぐる繞つて番人の家らしきを見出せば、小童がくぐり戸を開いて入れて呉れた。大成殿は湯島の大成殿と相等しく、なか／＼立派である。小童に五錢與へて出づれば、足らぬらしくてその母が罵つて居る様であつた。嚮に入りし側門を出でんとすれば、鎖して二三の小童が手を出して居つた。錢をくれれば開かうといふ意であらう。大に叱り飛ばして自ら門を開いて出た。文廟も斯く取扱はれ、斯る人等

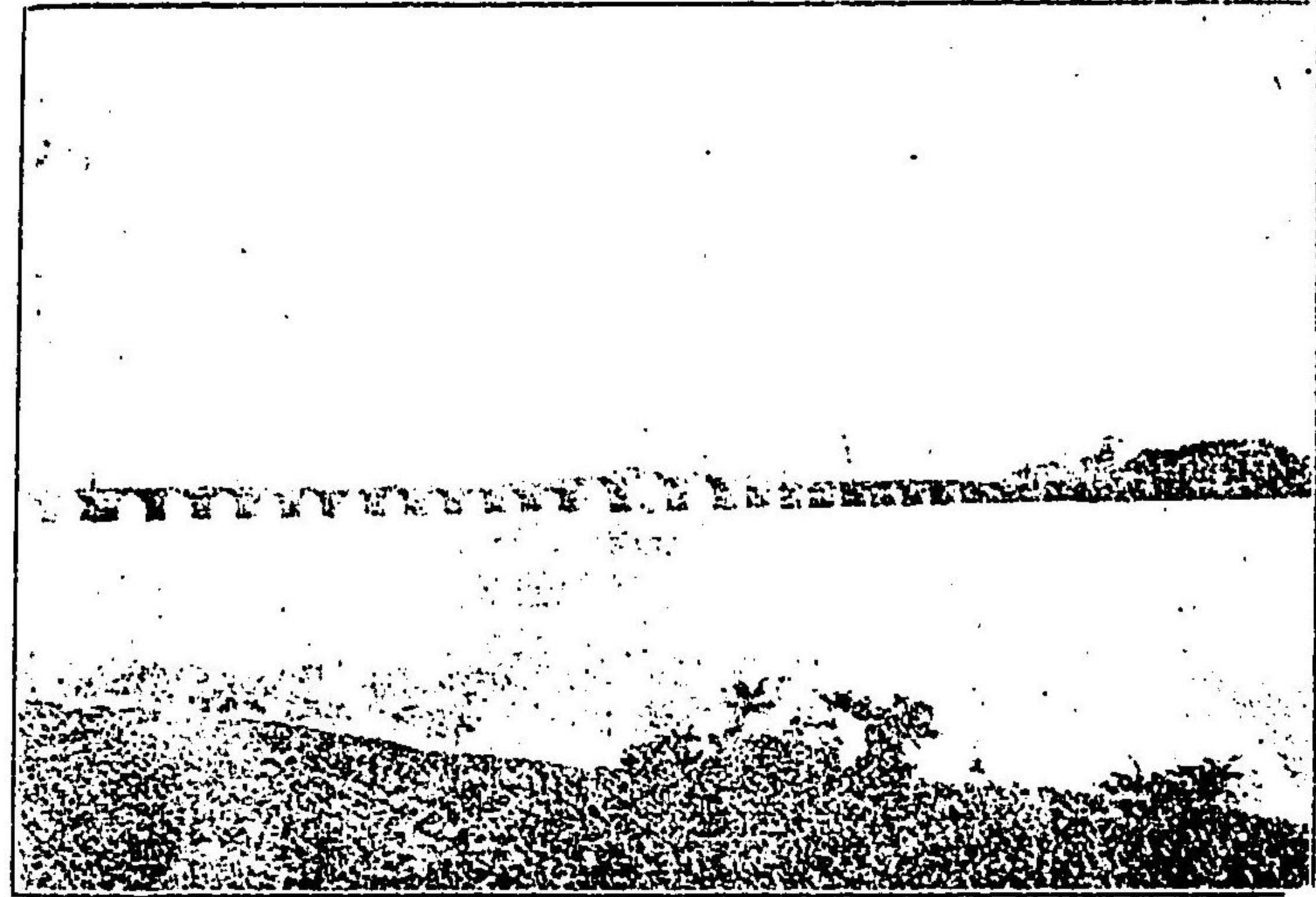
によつて守護せられて居るのは迷惑の至りである。さりとは支那の聖人の教も衰へたるかなと慨歎の至りであつた。創立者は宋の范仲淹(宰相、岳陽樓記の作者)で、此地の人である。茲に府學を起したのである。

二三町で滄浪亭がある。蘇子美の卜居せし處で、池の傍に奇石を累ね、臺榭など皆奇想を凝らしたものである。その前に蘇州中學堂がある。近く高等學堂と師範學堂とある。その中學を參觀した。始めに出て筆談したのは文案員宋殿元、案内して呉れたのが監學錢保泰、皆親切であつた。中にも錢保泰は、その兄十餘年前清國公使裕庚に従つて日本に來り、横濱領事をなせし由で、大に喜んで居つた。近き中に必らず日本に遊び、予を尋ねべしと語つた。

それより北に進めば支那人二名が「大日本帝國郵便局」と襟に染め貫きたる衣を着、郵便物を持ち行くを見たるはうれしかつた。撫署即ち江蘇省巡撫の官廳前を通つた。長髮賊の時は江蘇巡撫は李鴻章で、大に戦つたのである。玄妙觀といふ道教の寺院、これは淺草の觀音の如く雜沓する處など通り、西の方門

領事館を
訪ふ

嚶、杭州
に向ふ



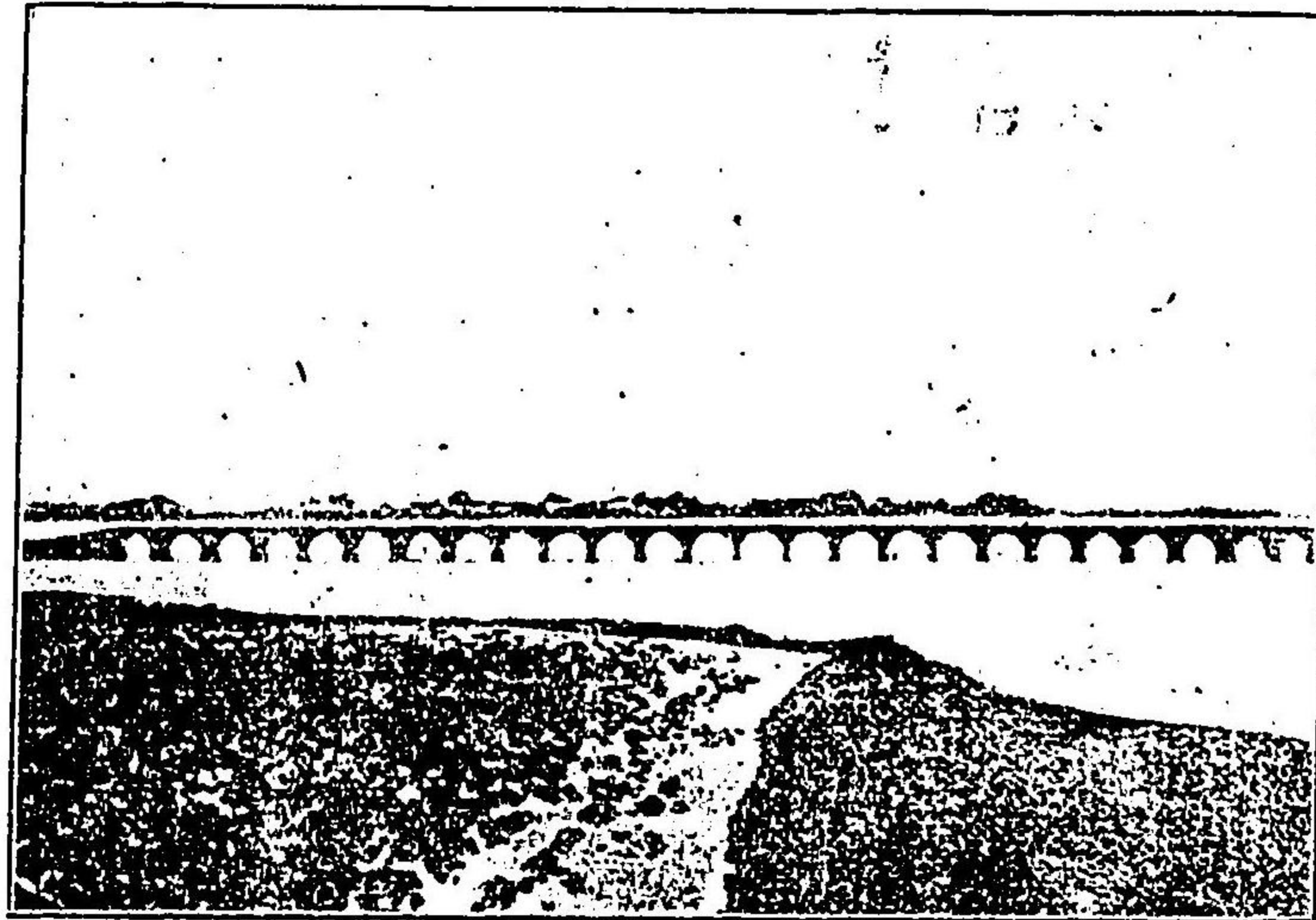
寶

帶

に出た。茲に伍子胥の邸宅があつたのである。かくて彼織物を見、我物産の店頭にあるものなど見て、日本租界に歸り、領事館に至りて領事代理池永林一氏を訪ひて、親切に迎へられ、當地の事情を巨細承りて旅館に歸り晝食して午後二時杭州行の汽船に乗る。出發に際して近所の家告別に巡る。人情は面白いものである。船は日清汽船會社のもので、吳門橋畔から出るのである。長十二三間もの二艘を連結せるので、その一が引くのである。一等室は最も後に

右は蘇州
左は杭州
方面

一室の獨
占



橋

ある。予飛び込めば老いたる事務員が来て、日本語で唯「一等、二等」といふ。予は一等と答へた。これより杭州まで百二十七浬。一等船賃驚く勿れ僅に一弗と四十仙である。(二等七十仙、三等四十仙)それで夕食附である。一等室は八疊位、周圍に造り付けの寢臺が四箇あつて中に卓子椅子がある。鍵かけて寝ることが出来る。或紀行文を見て、船旅の非常に困難なることが述べてあつたので、實は心配したが意外によかつた。幸に相客がなくて終始獨占。二等には

室がある。三等は客室がなくて、皆甲板上二尺許の高さにズックを張り、其間にもぐり込んで寝るのである。船客は百人位あつた。皆おとなしい。船進みて日本租界の前を通ずれば、昨夜散歩を共にせし人々皆柳の樹の下に出でてハンカチーフを振る。一里弱にして右に有名なる寶帯橋を見て通る。之は大運河と之に直角に交叉せる運河(太湖上海間)の膨れたる滄葦湖が、大運河と交叉する處にあつて長さ二百間。空洞五十二を有する一大石橋である。遠く之を望めば蜿蜒として長蛇の如くで、眞に天工を奪ふものである。漢の武帝の時始めて架設せられ、唐の時刺史王仲舒自己の束帶を贈ぎ、以て修繕費を助けたるによりて此名ありといふ。

大運河は幅十七八間より四十間。兩側は相連る田圃で村落は遠い。處々に穹隆状の大なる石橋がある。これはなか／＼費用のかかれるもので、これは我國にて見るべからざる處である。夕暮に至りて南灣といふ市街に泊すれば、人多く集り来る。予は窓外に立ちて眺め居れば、兒童等は指して「トンヤントンヤ

ン」として珍らしがる。飛んだ見世物になつた。之より大運河と岐れて右の方湖州に向つた。水は漫々として湛へ、湖の如き處を屢通過す。岸至つて低し。今夜はこれ陰曆十五夜。天色水の如し。萬籟共に寂たる間を、汽船のみ音を立てて細漣を起して進み、月光の激漣として銀波を散らす有様は、實に崇高なる景色であつた。夜十一時湖州に寄泊す。茲は太湖の南岸、浙江省の入口である。人口十萬。生絲織物の産地である。棟の尖りたる奇妙なる家のみ多かつた。蘇州出發以來一語も發しない。寝ねんとすれば船の飼猫來つてニヤーと鳴く。此時始めて日本語を聞いたと思つた。

第十四章 杭州概説 (Hang-chau)

- 杭州の大觀
- 杭州の沿革一覽表
- 會稽山と紹興
- 吳越王錢鏐
- 宋の高宗臨安に都す
- 忠臣岳飛
- 賈似道の專恣
- 文天祥
- 屋山の戰
- 弘安の役
- 杭州盛時の美觀
- 長髮賊
- 杭州城
- 立馬吳山第一峰

本邦居留民と清國人との葛藤 洪宸橋 湖墅 日本租界 拱宸停車
場 開口 西湖の勝 風景の價値 西湖十景 錢隱寺 杭州の
産物

杭州は南宋の都城臨安府で、今浙江省城のある處である。蘇州と共に江南の名都である。馬關條約によりて明治二十九年開港せられたるもので、上海、蘇州と鼎足をなし、蘇州を距る百二十七哩。上海を距る水上百五十哩にある。而して蘇州とは大運河を以て通じ、上海とは滬杭鐵道を以て連接し、行程百二十哩。急行は五時間半で達するのである。錢塘灣の奥、錢塘江の北岸に近くある。人口三十萬。氣候溫和、土地膏沃で、物産の中心である。商工業の盛なること遠く蘇州の及ばぬ處である。城西には支那の絶勝といはるゝ西湖を控へ、明媚なる山水に圍繞せられ、又文學の淵藪である。故に江南人は誇つて「上有天堂、下有蘇杭」といふ。

今此地の地理を説くに先ちて、その歴史を語る必要がある。

皇紀百六十四年(春秋時代) 越王句踐元年。此頃越領。

三百二十七年 楚、越を滅す。
四百四十二年 秦始皇帝東巡し、杭州を経て會稽山に至る。
四百五十二年 項羽兵を會稽に起す。後八年にして亡ぶ。
千五百六十六年 錢鏐吳越王となる。後五代七十年にして宋將曹彬に滅ぼさる。
千七百八十七年 宋高宗位に即く。此頃金人入寇す。
千七百九十二年 宋高宗臨安に入り、後都を茲に定む。之より南宋時代といふ。
千八百一年 (崇徳の末年)岳飛を殺す。此頃宰相秦檜威權を振ふ。朱熹出づ。
千八百六十六年 蒙古の太祖起る。
千五百二十七年 宰相賈似道第を西湖葛嶺に建つ。
千九百三十四年 元軍來攻、賈似道の軍破れ、范文虎元に降る。
千九百三十六年 元兵宋帝を以て北に去る。皇兄海に逃れ宋帝となる。
千九百三十九年 宋滅ぶ。陸秀夫、張世傑之に死す。文天祥擒はれて屈せず。後四年にして殺さる。
千九百四十二年 弘安の役。
千九百四十二年 此頃倭寇盛なり。
千九百四十二年 長髮賊平らぐ。四年間その據る處となり、都城大に荒廢せり。
支那の文化は黄河の谷に始まる。太古時代は、此地は化外で世に顯れなかつた。その世に顯はれたるは越王句踐の時である。杭州の東南三十里に會稽山と

いふ高くない山がある。その麓に紹興府(有名なる紹興酒の産地)がある。越王はその越王臺に居つたので、項羽の起つたのも紹興である。かく此地方の上古史の中心は會稽地方であつたのである。唐末に錢鏐、杭州に出でて吳越王となり、所謂五代の間五代七十年の小國を茲に維持したが、遂に宋將曹彬に降つたのである。宋は始百六十餘年は黄河の岸なる開封に都したが、北方に契丹起つて遼國を建て、次第に宋に迫るや、金國次ぎて起り、遼を滅ぼして代り、次第に北方より壓したれば、宋は高宗に至つて開封府を棄てて南狩し、都を茲に奠めて凡百四十年の餘威を茲で保つたのである。蓋し宋が受けたる北敵は、遼、金、元の三國で、南宋時代に於ては、その金、元の壓迫を受けたのである。その意外に永く續きしは、敵國が互に相攻伐せしによる。

高宗、金に壓せられて臨安に都するや、又金人の來寇が甚しく、和戰の議論が盛んであつた。此間に於て和議論者たる秦檜が相となつて、一時權威を恣にした。忠臣岳飛計を以て屢金の軍を破つた。宋帝は親ら「精忠岳飛」と旗に

書して與へた。金は飛を殺さざれば和議成らずといふ。秦檜即ち飛を召し還し罪を構成して獄に下す。獄吏反狀を詰れば飛、背を袒して示す。即ち「盡忠報國」の四大字を入墨してあつた。遂に棄市された。その後鐵木眞(元の太祖、成吉思汗)外蒙古に起りて傍近諸國を降し、金に迫り、遂に抵抗少き中央亞細亞に出で、部將を遣つて歐の東部を蹂躙せしめた。その子孫に至り、宋と聯合して金を夾撃して之を滅ぼした。之より蒙古と境を接して國歩漸く艱難となつて來たのである。元軍は北は連河の方面より、西は漢陽方面より倒天の勢にて迫り來る時に、賈似道、樞機を執り、國を憂へず。宅を西湖の葛嶺に構へ、船に乗りて五日に一たび入朝するといふ有様で、忠良は皆退けられた。元軍迫りたれば似道已むことを得ず自ら兵を率ゐて蕪湖に進みしが、安慶の將范文虎は早くも元軍に降り、己は敗れて後貶せられ途に殺された。元軍は臨安に迫つたから張世傑、文天祥等入衛した。元軍入る。帝降る。帝の同胞は臨安を出でて福州に走り皇兄帝位につく。元軍追ひ至る。天祥は戦ひ破れ、廣東に近き五坡嶺

にて元の追兵に擒はれた。その獄中の作たる正氣歌は極めて有名である。帝崩じて皇弟立ち、香港に立き崖山にて元軍と會戦し、陸秀夫は九歳の帝を負ふて海に投ず。浮屍十餘萬。壇の浦の戦に極めてよく似て居る。

斯る有様で宋は永く北強の壓迫をうけ、江南に偏在した。南宋の振はざるは茲に蟄居した爲であるが、又百餘年間の小康を保ちたるもこれがためである。

その有様はよく我南朝に似て居る。忠臣岳飛、文天祥等の至誠國に盡せしことも能く我南朝の忠臣に似て居る。斯く考ふれば杭州は實に我吉野である。斯くて南風競はず。遂に元の世祖忽必烈の爲に花を散らされたのである。而してその滅びしは我弘安二年で、その四年には十餘萬の大軍雲霞の如くに我鎮西に寇して大敗して歸つたのである。而して此來寇には江南軍十萬と、高麗軍四萬とがあつたが、その江南軍は宋の降將范文虎が將となり、彼紹興附近より舟師を發し、五島に沿ひて進み、博多の近海に顯はれたのである。

杭州の南宋の帝都たりし頃は、輪奐の美を極め、宋朝滅亡後も猶依然として

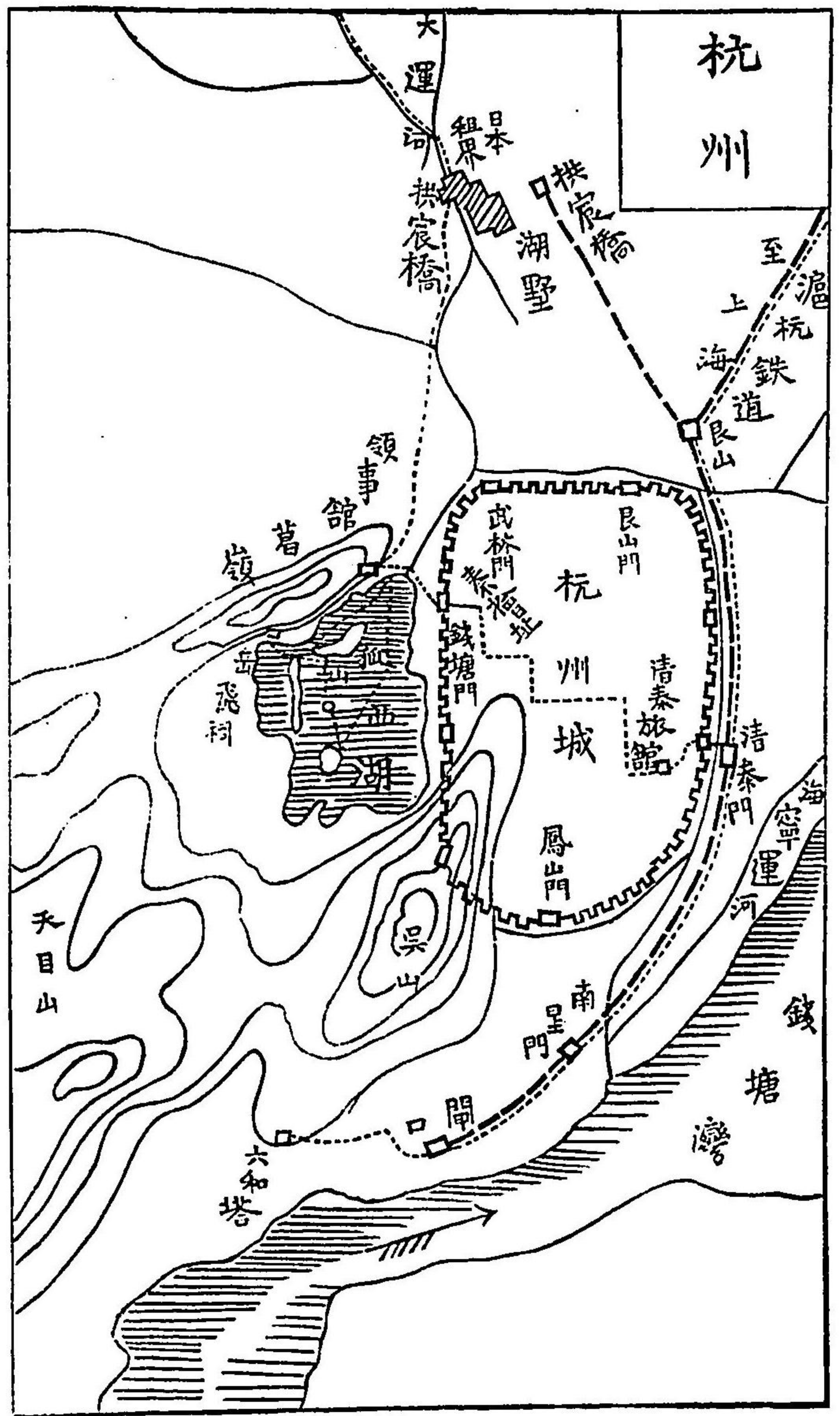
繁榮を維持したのである。以太利人マルコポロは元の世祖忽必烈に仕へた人である。その子宰相博羅、桂冠の後杭州に遊びてその美觀に驚き、「景勝宮殿の莊麗世界に比類なし」と言つたといふ事である。

其後歐洲船漸く來り、その近き激浦に出入するに及びては更に名を知られ、

清朝も始は浙江、福建二省の總督を茲に置いたのである。(後には之を福州に移し、巡撫を置く)長髮賊の亂には、咸豐十一年此地を陥され、爾後官兵の克復まで四年間はその害を被り、數回の兵燹に罹つて殆んど全府を失つた。爾來數十年漸く恢復して來つて、三十萬の人口を有するに至つたのである。本邦の如きは常に望みを囁して茲に十萬坪の居留地を置いたが、未だ發達の運に向はない。大に覺悟するにあらざれば前途憂東ないと思ふ。

杭州城は略長方形をなし、周圍五里許ある。南西北の三面は山、東の一面は田圃、西は周圍三里餘の西湖に枕む。湖を隔てて遙に天目山の諸山を望む。その脈の湖の南岸に連るものが城内に入つて高さ百メートル許の山を起す。之を吳

杭州



立馬吳山第一峰

繁華の區

邦人及人の清職

山といふ。吳人が子胥を葬りし胥山は茲であるといふ説がある。明太祖の「立馬吳山第一峰」の詩によれば、高山の様にも想像されるが、到つて見れば斯くの如くである。我國でも「衣はすてふ天の香久山」ときけば高い山の様に思はるが、實は二十間許の山であることと同一である。此吳山の頂上は芝山であるが、その中腹以下の斜面には官廳、官邸などが多く、昔の宮城のあつた處である。中部は人家稠密で、諸官衙巨商大賈のある處である。北部は最も寂寥である。門は周圍に十個ある。城郭は高さ五六門若しくは七八間で、嚴然たるものである。人家は主として城内にあつて、蘇州の如く城外にあるものが多い。故に城内は意外に盛んである。

邦人の杭州に在留する者七八十人。多くは城内に住んで藥商、雜貨商、寫眞師などやつて居つた。然るに此年の春、清國無賴の徒と葛藤を生じた。清國官憲は邦人を驅つて城外に移轉せしめんとし、領事館は之を拒んだ。予が旅行せし頃は談判中であつたが、其後賠償金を出さしめて彼等の要求に従つたといふ事

拱宸橋

である。

杭州城外にて盛んなるは拱宸橋と開口とである。拱宸橋は城北二里にあつて、隨の煬帝が北京の近郊通州より茲に通じたる大運河の南端である。杭州城の東面を通ずる河は、海甯運河と稱して東北方の海甯府と通するのである。右二運河の水の高さは水平の差が七八尺ある。由つて諸所に急流を造つて小舟を上下せしむる處がある。拱宸橋の周圍に市街がある。湖墅といふ。橋の東は各國租界で、道路橋梁は清國地方官にて設備し、税館、茶館、劇場、料理店、西洋雜貨店など殆んど備はつて杭州に於ける最もハイカラなる地域である。蘇州上海と往復する船舶毎年一萬餘隻。帆船林立である。日清汽船會社出張所は拱宸橋の東畔にある。各國租界の北隣に日本租界がある。地域は蘇州と等しく十萬坪といふ廣大の地であるが、甚發達しない。唯郵便局、警察署及日清汽船會社所屬の倉庫一棟のみで、未だ本邦居留人の家屋もない。卑濕の地で野草密生し、雉兔出沒して唯好獵場であると聞きては遺憾の極である。如何にして此

湖墅

日本租界

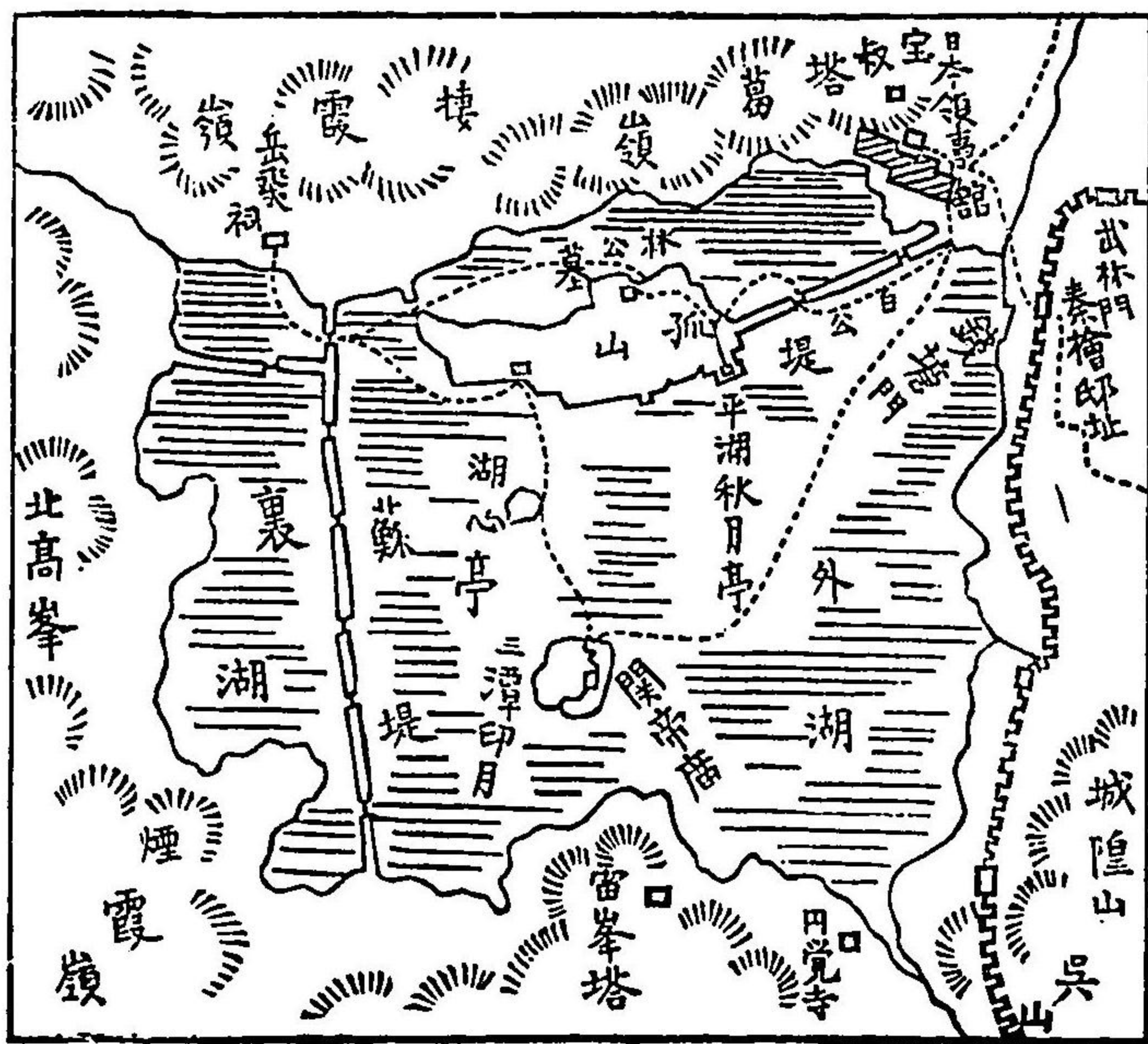
草澤の地を變じて繁榮の區となすべきか。近き將來に於ては甚だ覺束ない事である。

拱宸停車場

拱宸橋の南方五六町に拱宸停車場がある。滬杭鐵道支線の北端である。此線を湖墅江干線といふ。明治四十年に出來たので、本線より二年前に通じたのである。杭州城外東北隅に艮山停車場にて本線に合するのである。次の停車場が清泰門停車場で、杭州城の東方、城外にある。茲は滬杭鐵道の基點である。之を門内に移さんとして工事中であつた。清泰門内には清泰旅館其他の支那旅館の、日本人に慣れたのがあるから、茲に至つて宿泊すべきである。清泰門南方二里の地に江干(或は開口)がある。錢塘江に臨みたる港で、杭州の貨物を海に出す口である。人口一二萬を有する都會で、鐵道は茲を末端とす。錢塘江の海運が盛大ならば一層繁榮となるべけれども、錢塘江の海運は意外に少く、殆んど汽船の出入のない位であるから、従つて江干の發達が不十分である。半里許上流に六和塔がある。錢塘江畔の風景は甚宜しい。

開口

西湖は支那の絶勝である。杭州城郭に接してその西に擴がり直徑一里、周圍三里許。三面は山翠參差として湖を繞る。山に遠きあり近きあり。雄偉なるあり、奇抜なるありて變化の妙を極め、湖水清冽にして孤山、湖心亭、三潭印月等の風景の佳絶なる島が浮んで居る。樓閣亭榭の人工の美を盡したるが其間に散在し、或は煉瓦の古塔の頽破して兀立せるに樹木の生じ、長蘿の懸れるなど風致の極めて佳なるがある。西湖十景といふがある。實に西湖の周圍は尺地寸土と雖も悉く名勝古跡である。自然と人工と相待ちて美なること斯の如きは蓋し天下無比であらう。景色の雄大なるは洞庭、鄱陽、太湖には及ばぬが、風景の美なるは茲を推さねばならぬ。支那人が西湖を以て天下の絶勝と稱する寔に故あり。然れどもその景色は小である。寺崎畫伯など之を箱庭的と評して居るが適評である。都府に接して四時畫舫の豪遊地となりて陽氣なる處である。本邦に於て之に似たる地形を擧ぐれば、中禪寺湖、蘆湖、長崎港などである。此湖もとは錢塘江に通じ、秦始皇が錢塘江を渡つた時は此北岸より船出したの



西湖の圖

である。後堤を築きて之を切り、その水を大运河の水源としたのである。

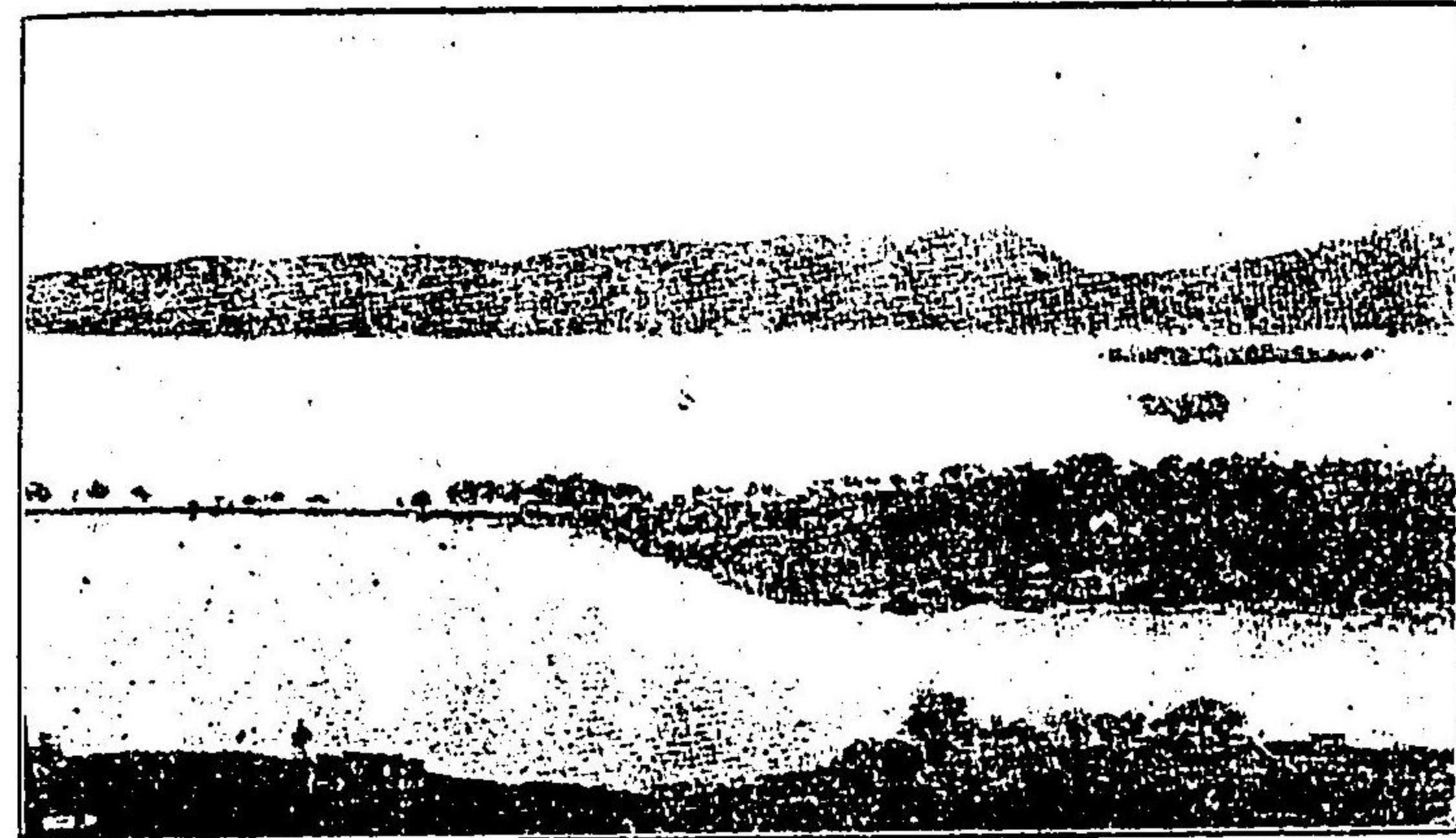
飲湖上初晴後雨
東坡

水光潑潑晴偏好。山色空濛雨亦奇。若把西湖比西子。淡粧濃抹總相宜。西湖の周圍にある名勝に就て言はば、北におるが有名なる葛嶺で、その頂に寶俣塔がある。麓の稍高き處に聚落がある。茲に日本領

孤山

靈隱寺

杭州の産物

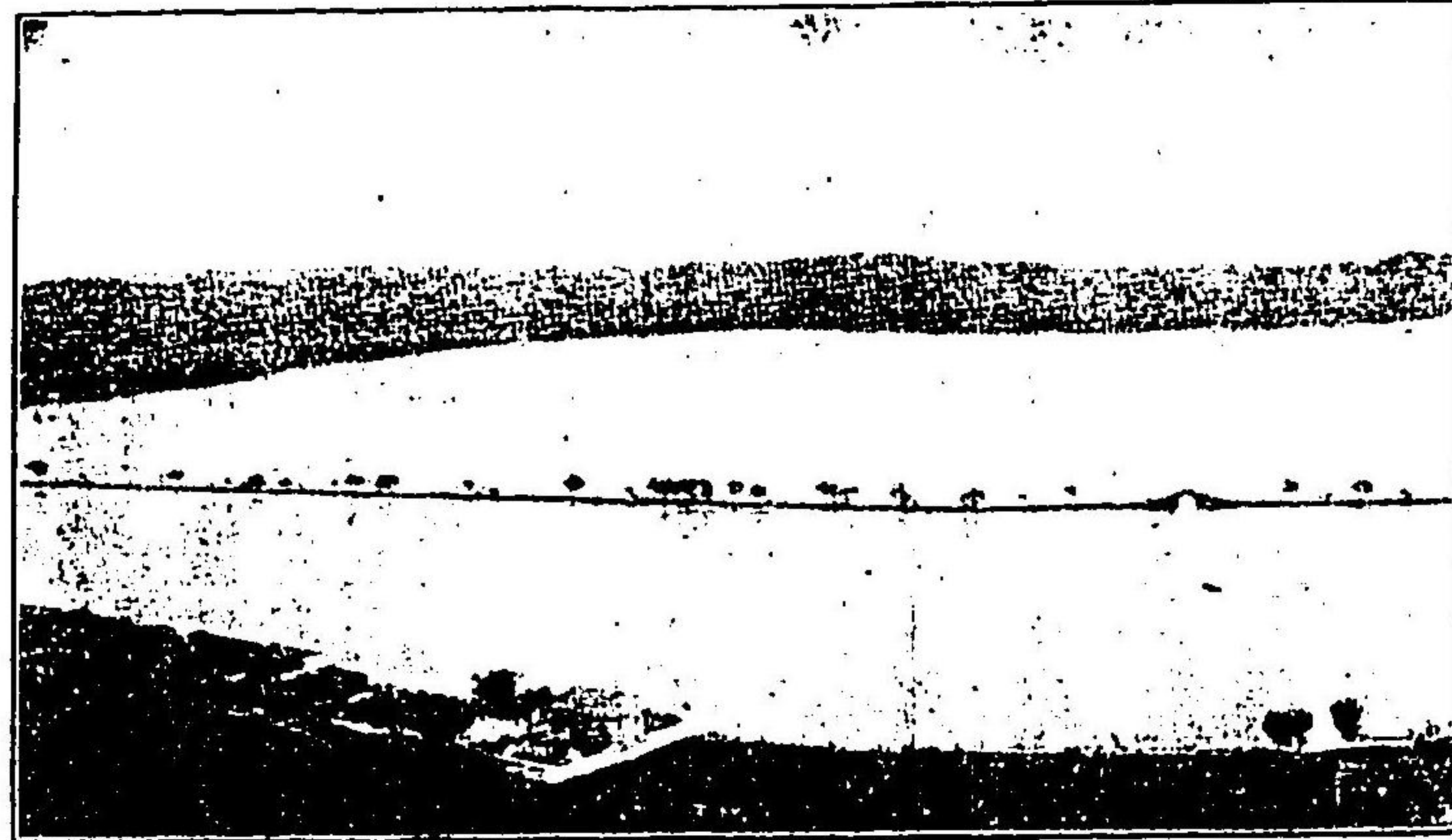


湖西 (山吳、月印潭三、亭心湖、島山孤りよ近)

事館ある。蓋し西湖の第一勝である。孤山の島には名勝が甚多い。その西に南北に互れる長堤を蘇堤といふ。湖の西北隅に岳飛の廟がある。その前を通つて進めば靈隱寺の靈境に至る。岩面洞内に佛像を彫刻し、又羅漢堂に五百羅漢があるを以て有名である。林風清涼なる仙境で、所謂天竺の勝は其奥にある。湖中の湖心亭、三潭印月の島亦面白く、到る處楊柳のみが多い。その煙を置めたる景色は甚だよろしい。清朝に至りても康熙乾隆帝など屢行幸して此景色を賞したのである。

杭州の産物は蠶絲、絹織物(綢緞)を主とす。

葛嶺上より見下したる全景



景全 (城州杭、隄沙白、館事領りよ近)

次に棉花の輸出が盛んである。杭扇として支那にて珍重せらるる扇子も出る。碑文の石摺、西湖の蓴菜は土産物として佳なるものである。本邦よりの輸入は上海より複輸入するので分明でないが、化粧品、藥品などである。

第十五章 杭州見物

- 運河の夜景 調査不十分なる杭州
- 地獄で佛 橋の構造 赤穂義士
- 武林氏の祖先 日本領事館到着
- 西湖の舟遊 葛嶺 白沙隄
- 三潭印月 湖心亭 命樓 蘇
- 隄 東坡の才 岳飛の祠及墓

いちめられたる秦檜 林和靖の跡 平湖秋月亭 都民の無氣力 清
 泰旅館 轎丁の強請 客室の構造 失敗 驚くべき便所 地獄で
 佛 清泰門停車場 杭州の地圖 開口 錢塘江 津波の奇觀
 長閑なる田舎路 六和塔 會稽山 越王句踐 項羽 安倍仲磨
 遣唐使の道筋 元寇の江南軍發航地 滬杭鐵道の距離賃金表 車上の
 觀 植物 郊外の棺 上海着 允澎入唐記の一節

崇高なる
運河の夜

八月十九日午後二時、蘇州を發して大運河を汽船にて杭州に向ひたる予は、
 夜十一時湖州府を過ぎ、獨占せる一室を閉ぢて寐たのである。満月の冷やかに
 湖面と運河とに映するいと寂しき光景は一種獨特で。予は從來かかる崇高なる
 景色に接した事はない。爲に夜中に二三回も起きて見た。曉近くなれば曉霧一
 帯江村を鎖ざし、炊煙縷々として岸樹を繞りて昇るを見る。夜既にあけたる頃
 ポーイ(實は老爺)が來つて窓の戸を叩く。起きて戸を開けば一人の若紳士の乗
 り込んだのが、予が室に入り來つた。彼若紳士は卓上にある大土瓶を執つて其
 口より直接に冷たい茶を飲むのである。謹慎に見ゆる紳士でも猶斯の如くであ
 る。支那人の無作法には實にあきれて仕舞ふ。忽にして大なる石橋の下に着い

かゝる若
紳士

杭州調査
資料の缺

た。時に午前五時半。

予は杭州に就ては、調査する材料が甚乏しかつた。旅行中屢杭州の地理
 を人に聞いたが、遂に要領を得なかつた。到達したらば神の恵によつて何とか
 工夫はつく事ならんと考へて、大膽に赴いたのである。斯る覺束なき旅行は始
 めてである。かくて午前五時半といふに大なる石橋の下に着いた。多分拱宸橋
 だらうと思つて兎に角上陸する事にした。ポーイは荷物など擔いで出掛ける。
 予の言葉の出來ぬを見て、橋に近き日清汽船會社出張所に至りその應接室に
 案内した。机上を見れば日本人宛の書狀がある。空谷に聲音をさくとは此事で
 あらう。そのポーイが二階に登りゆくから、日本人が下り來る事と考へたが暫
 らく來ない。茲に日本旅館白川屋といふのがあるといふ事を知つて居たから、
 其宿に着かんとして外に出た。彼ポーイ居りて又心配して予を再び應接室に連
 れ込むのである。其處へ出張所長山成和四夫氏が降りて來た。此時は實にうれ
 しかつた。導かれて樓上に登り、朝食の饗應を受けた。異境に於ける厚意實に

雲をつか
むが如き
杭州

地獄で佛
其三

橋の構造

謝するに語なし。聞けば白川屋は廢業したのである。ボーイが心配して予をして山成氏に面會せしめ様としたのは、此故であるといふ事がわかつた。杭州城内外の地理など承り、轎を雇ひて茲を出發し、西南方二里、西湖の畔にある日本領事館に向つた。

轎は杭州に於ける唯一の交通機關で、腕車も驢もない。轎は本邦の輿の位の大ききで、極めて軽く出來て居る。腰掛けて乗るのである。棒の長さ三間許。

之を輿の高さの半分の處に着け、しわくと撓むのである。輿賃は二里で一弗二十仙。輿昇は三人である。即ち一人は附隨して行き交代者となるのである。

西南に向ひ桑樹のみ多き處を通る。民家は殆んどない。幅十間許の川に沿ひて

進んだが、此川は西湖の水を大運河に入れる河である。草多く、道狭く、大都

會の近郊とは思はれなかつた。やがて杭州城郭が七八町の前面に顯はれた。

南京城の蜿蜒たるが如くではない。直線なる城郭である。嚴めしき樓門が見え

た。これが武林門である。赤穂義士武林唯七の祖先の出た處と傳へらる。武林

杭州城の遠望
赤穂義士
武林唯七の
祖先

日本領事館に至る



轎

氏の祖先は杭州の此門の附近に住みけるに、明軍に従ひ朝鮮にて我太祖の軍を防ぎしが、淺野氏に歸して我臣民となり、子孫に彼忠烈なる義士を出すに至つたのである。

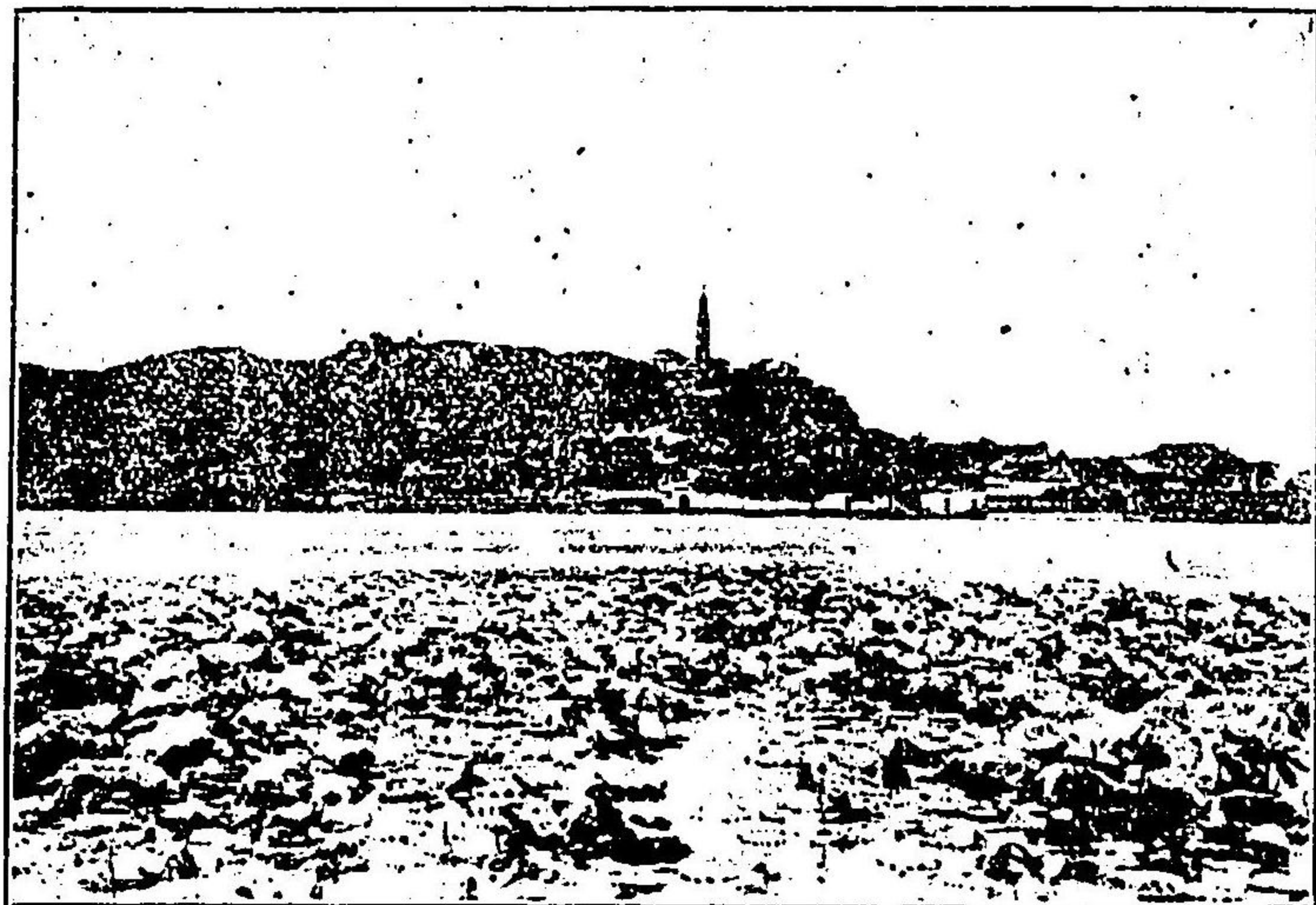
午前十時半日本領事館に到着した領事館は米國領事館の立退いた跡である。(杭州には今は日英領事館のみ)葛嶺の麓にて、湖水より十四五間高さ處にある。位置良好、構造善美、庭園幽雅にして眺望絶佳である。西湖の第一勝を占めて居る。領事代理池部政次氏、日本人三四名、支那人二

三名居つた。池部氏は杭州に關する意見など述べられ、大に便宜を與へて呉れた。室より一望すれば西湖の全景眸中に入る。湖面一碧鏡の如く、數箇の島嶼散在し、吳山を始めとして山翠參差として湖を繞り、霞をこめて居る。實に風景佳絶である。

ボートを雇ひて西湖を周遊する事になつた。舟子は二人。予は中央に腰打ち懸けて居る。領事館の下を漕ぎ出して先づ最も遠き三潭印月の島に向ふ。水深からざるも清徹。四望一大パノラマである。顧みれば葛嶺の脈高さ四五十間許。その右の方骨秀でたる寶石山の稍平らかなる處に、寶俶塔といふ七重の塔がある。丁度領事館の上にある。外飾頽れて、下方の細くなれるなど最も妙である。葛嶺は宋末の惡宰相賈似道が邸を構へし處、十八史略に

似道建第西湖葛嶺自娛。五日一乘湖船入朝。不赴堂治事。吏抱文書就第呈署。他相書紙尾而已。

とあるは是である。領事館の下より孤山に至る隄がある。白沙隄といふ。舟を



(館事領、塔俶寶) 嶺 葛 (りよ島山孤)

通ずるために高き橋がある。近きを断橋といふ。形が頗る面白い。孤山は湖中最も大きい島で、徑七八町もある。唐宋時代には樓閣が參差たりしとの事である。今でも文瀾閣、平湖秋月亭などの建築があつて、その水に映れる有様など實に趣がある。東方杭州の城郭の水に迫れるなど亦面白い。

遂に三潭印月の島に上陸した。これは徑四五町の島である。而して島の中が大部分は池で、之には蓮荷を植ゑる香氣が甚高い。先づ驚くは大な

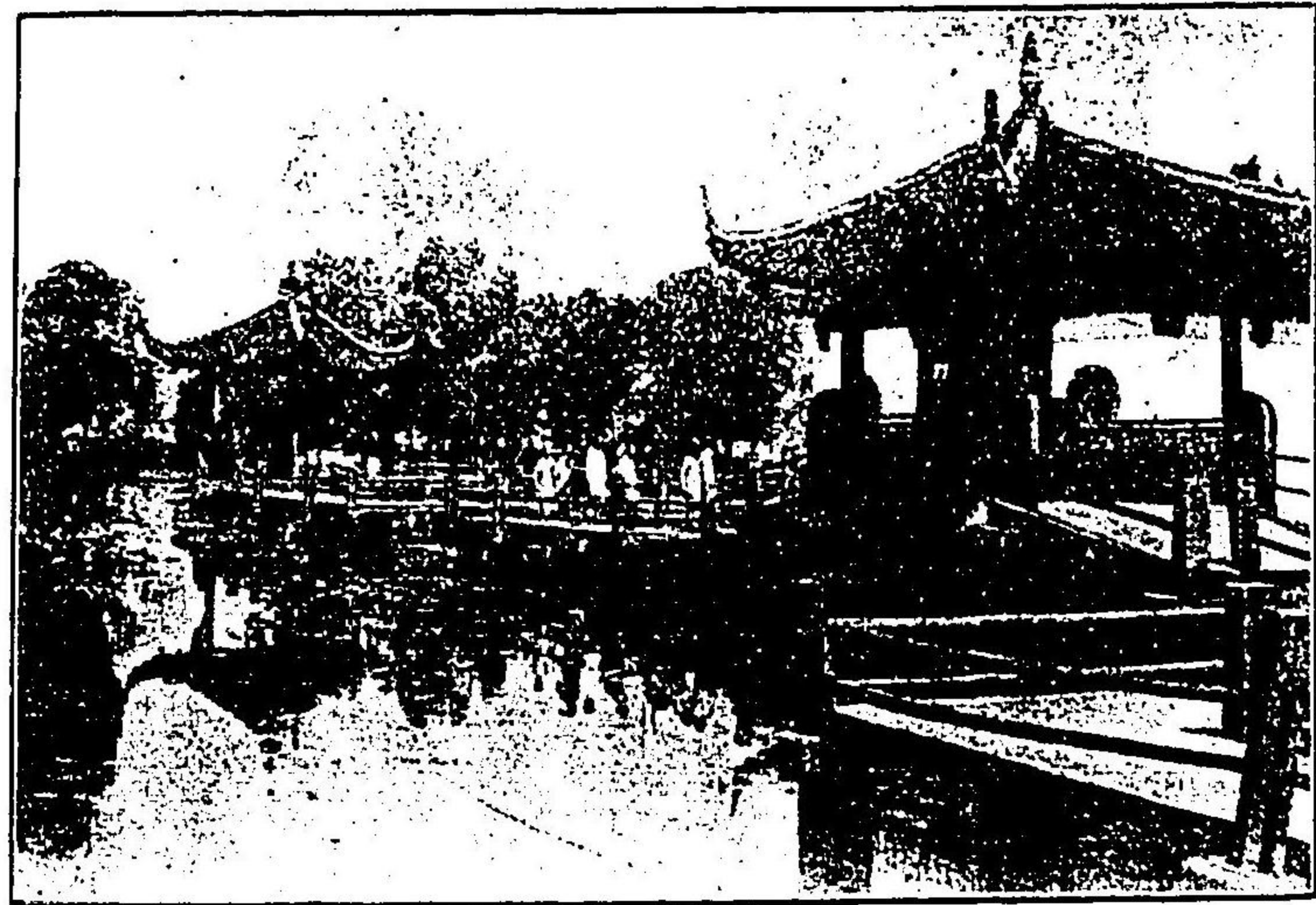
雷峰塔

表忠觀の碑

湖心亭

俞樓

蘇隄



三潭印月

る石材を以て架したる幅一丈もある道が迂餘曲折して五六町も連り、三四の水亭を連結して居る。中央にある建物は昔は禪林たりしを、彼李鴻章等と共に髮賊を討ちたる名將彭玉麟が、茲に水莊を營みて亭榭を建てたのを、今は再び寺とし關帝など祀つてある。洒灑たる亭榭、樹影水光參差の間にありて實に俗塵を離れて居る。その裏の端に至れば近き湖中に三つの石塔が鼎足の形に立てられてある。月光潭に映すれば、影は分れて三つとなるによりて三潭明月と

いふといふ事である。此處より前面の山を眺むれば、七八町隔てて雷峰塔といふ大なる古塔がある。塔形頗る怪奇。吳越王妃の建つる處であるといふ。赤色磚より成り、檐など破れし間に雜樹叢生し、藤蘿に掩はれたるなど甚だ風致がある。東坡の建てたる有名な表忠觀の碑は此下の錢王祠にある。

引返へして湖心亭の島に上陸す。これは徑二町許の島で、寺院あり。古畫古器物など陳列してある。次に孤山に上陸し俞樓に入る。これは近世の大儒俞樾(字は曲園)の別莊で、今では人ありて石摺など盛んに賣つて居る。岳飛、文天祥の文字の石摺など最も多い。その階上は、北清事件にて戦死せし檜原陳政氏が杭州領事館に奉職せし時讀書せし處でいと懐かしかつた。次に船にて西に進めば蘇隄がある。これは西湖の西部を南北に劃せる隄で、蘇東堤が此地の通判をやつて居つた時に築いたもので、長三十六町、六橋を架す。蓋し東坡は湖面の壅塞するを憂ひて、土を浚つて長隄を造り、桑を植ゑ、其利を以て湖を修理したのである。清の康熙、乾隆二帝も屢此地に行幸せられ、橋に閘を作つて、淨

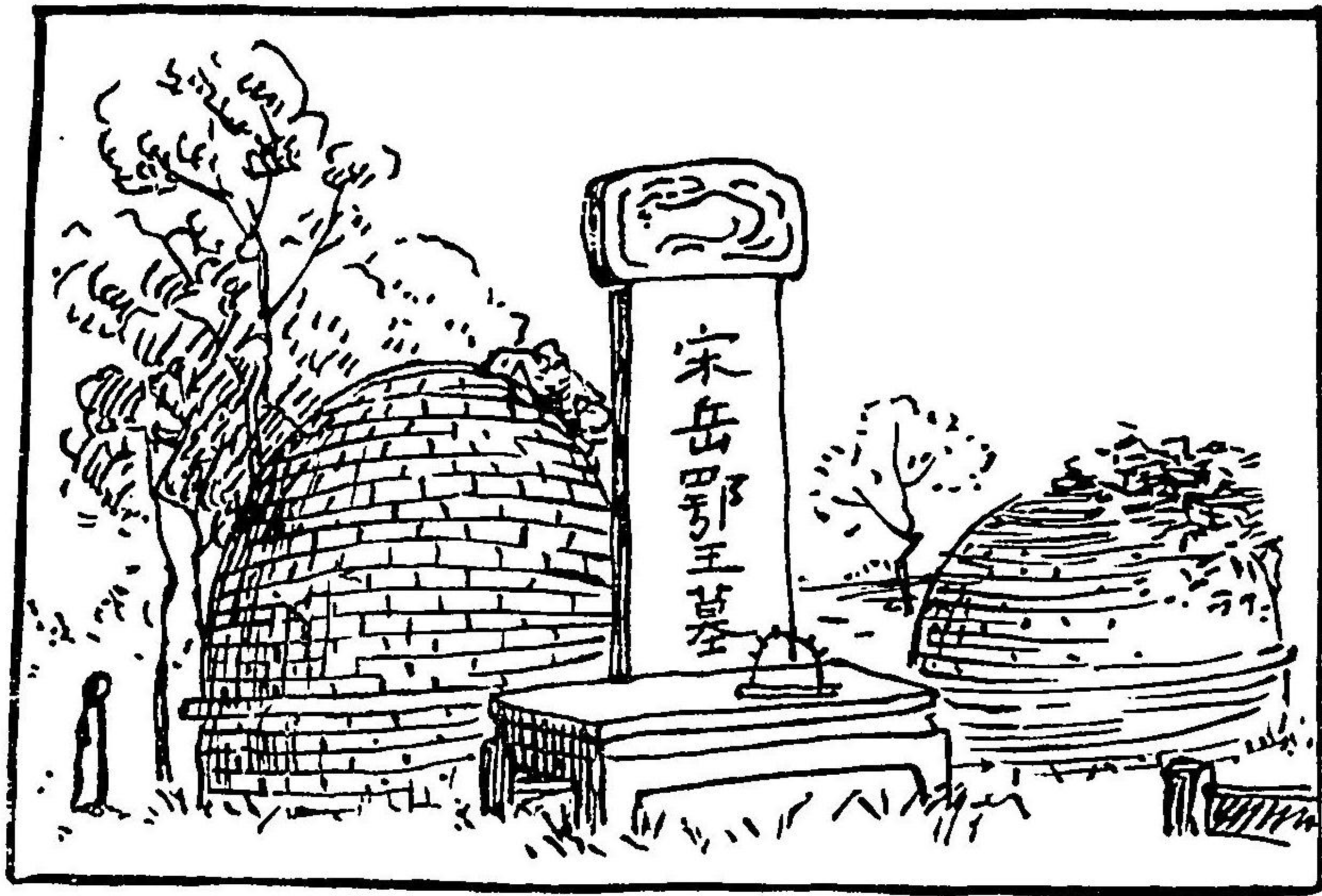
東坡の才

土の流れ入らぬ様にしたのである。東坡は經濟の道にも長け、又如才ない人であつた。杭州の名産たる扇子(杭扇)の始は、蘇東坡の爲に起つたといふ事である。東坡通判たりし時、扇商が負債を償ふこと能はずして訴へられた。東坡之を案じて何故に返償せぬかと言へば、扇子を作りしが賣れず、故に償却することを得ずといふ。東坡即ちその商人の扇子に文字を書けば、人争つて求む、これが杭扇の名を得し始めであるといふ事である。

岳飛の祠

上陸して岳王廟に詣でた。樓門のあたり茶亭あどあつて盛んである。本殿は立派であるが、肝腎なる岳飛の木像には紙を噛みてうちつけ、又カイゼル髭など書いてある。殿堂内の壁に名家の詩文が金石に刻して壁に嵌めてあるのが十數枚ある。茲で盛んに石摺を造つて居る人がある。予は紙と鐘墨とを出し、船頭を手傳はしめて澤山の石摺を刷つた。次に左の方に進めば、茲は壁があつて「報國盡忠」の四大文字が刻まれてある。次に岳飛の墓がある。墓守に十錢與へて入つて拜した。正面に半球形の岳飛の墓がある。高さ四間許ある。右に子岳

檜
れいぢめら
たる秦



墓之飛岳

雲の墓がある。稍小さい。大なる石表に「宋岳鄂王墓」と刻む。線香の烟縷々として昇る。墓と相對して秦檜夫妻、張俊、萬俟卨が蹲踞して後手に縛られたる鑄物の像がある。傍の碑に刻して曰く、

欽命浙江等承宣布使。重鑄三奸
惡秦檜王氏黨張俊萬俟卨劣
形一使。羅三跪忠武墓前。以爲
萬世不忠者戒。

乾隆十二年四月
四面放尿し、面となく體とな

理由を聽
けは興が
さめる

林和靖の
跡

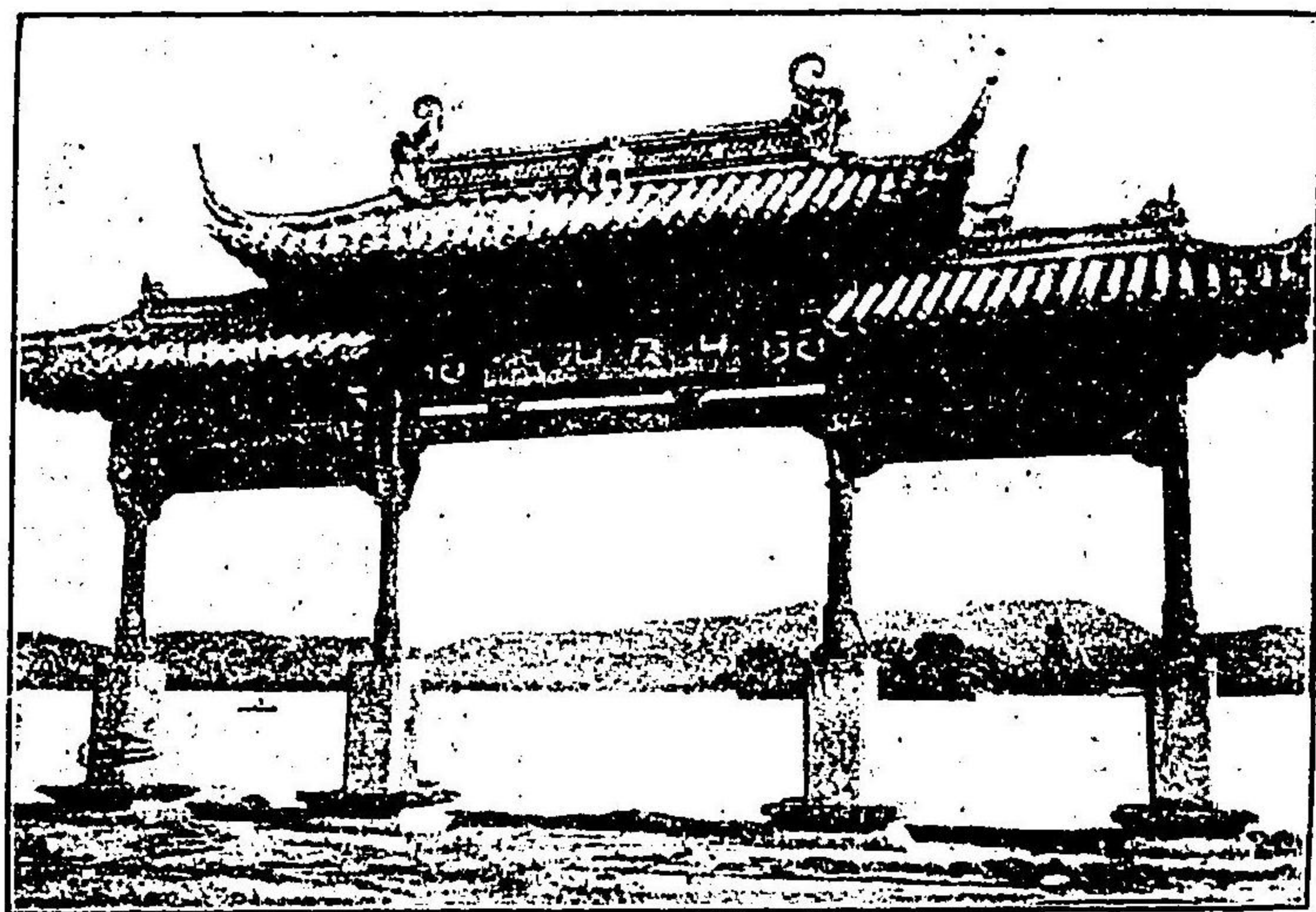
四賢祠

く痰を吐きかけ、大便までしてある。悪臭鼻を衝き甚しく汚穢である。その仕
打は甚だ極端だが、兎に角支那人が忠臣を尙び、奸邪を憎むだけは感心なりと
思へば、さにはあらで、岳飛を拜し、奸臣等を虐待すれば、商賈繁昌、作物豊
穰すといふ迷信から出づるといふと聞いては興が醒める。
船に乗りて孤山の裏に廻る。後湖といふ、山に倚りて宋の林和靖の隠遁の跡
がある。和靖名は逋、錢塘の人である。廬を茲に結び、仕進を求めず。梅を植
ゑ、鶴を飼ひ、自適すること二十年。足城市に及ばず。詩、畫、書共に巧みで
あつた。眞宗賜ふに粟帛を以てし、卒するや謚を賜ひて和靖先生といふ。名聲
一時に盛んであつた。船より登れば巢居閣といふ古雅なる一閣がある。清朝の
重建に係る。其前に放鶴亭がある。少しく上れば和靖先生墓と刻んだ墓があ
る。此邊梅樹が少くない。

その東に至れば茲に四賢祠がある。唐の李泌(徳宗の相)、白居易(樂天)蘇軾
(東坡)林逋の四人を祀つてある。何れも西湖の恩人である。繞つて南方に出づ

平湖秋月
亭

領事館に
歸る



文 瀾 閣 門 (望遠山吳亭心湖)

れば、茲に外湖の中に突き出して平
湖秋月亭がある。亭榭は古雅にして
宏、満々たる湖水は亭庭に溢れ、繁
茂せる楊柳の日を遮るなど、實に涼
味掬すべし。明月の夜は如何にと想
はれた。近傍文瀾閣など二三の名勝
を見て引返へし、ボートに乗れば、
ボートは湖畔の荷花蓮葉の重圍を突
いて出るのである。一種の興があつ
た。遂に出發點に上陸し、領事館に
歸つた。時既に三時である。館員に
船賃は何程與ふべきかと問へば四十
錢にてよかるべしといふ。予は一弗

にても甚安かるべしと謂へば、多く與ふれば後の爲に悪しといふ事であつた。斯る安い事は世に少いと思つた。

暫時談話して又轎を備ひ、城内の清泰旅館に向つて出發した。行程一里。賃錢は六十錢。領事館にて明瞭に彼等に言ひ渡して呉れ、彼等も喜んで承諾したのである。數町にして錢塘門より城内に入つた。門内は家は疎で、寧ろ原野である。茲は秦檜の邸宅のあつた處である。やがて市街に入る。次第に繁華になる。彼蘇州と共に住民遊惰の處と聞いたが實に左様で、市中にはさほどの用もなきに、ボンヤリして、二三十人位立つて居る處が多い。實に無氣力の相を顯はして居る。やがて轎丁は橋上に轎をおろして、予に近づいて何か頻りに言ふ。これは賃錢の増額を求むるものと思つたから黙して居つた。

遂に清泰旅館に到着した。これは改良支那旅館で、本邦人がよく泊るといふ事である。外門を入れれば茲は庭で、十餘臺の轎が却してある。進めば番頭が出て來つて頻りに愛嬌をふり蒔く。英語でやつても通じない。愈彼は啞の客を受

けたのである。此方にては今夜は筆談と覺悟して導かれて、二階の頭等大餐間といふ最もよい室に案内された。さてうれしやと腰うち掛くれば、驚くべし彼轎丁は土足の儘で予が室に入り來つて、頻りに増賃を求むるのである。轎丁が客室まで入り來るなど本邦人の想像外の事である。主人來つて轎丁を叱したが予は少額を與へた。彼等は何とか言ひながら歸つた。主人が出て來たから英語でやつて見たが少しも通じない。筆談で旅行の目的や道筋を語つたら喜んで居つた。

室は十六疊位の廣さで、先づ洋館である。床板は漆塗の様に濃くニスを塗つてある。支那流の寢臺即ち通常の寢臺に、帳の掛つてあるのがあつて、帳を閉づれば蚊帳になる。卓子椅子が二組、安樂椅子が室の内外に各一箇。又化粧盥嗽の装置がある。油畫、定價表、鏡など懸つて居る。間貸の制度で、一等室が一弗四十錢、次が八十錢、六十錢、二十八錢とある。食物は殊に誂へるのである。主人は暫らくお世辭のよい事を筆談して去る。即ち湯で體を拭つて休み居

れば、番頭來つて註文の品を承りたいと言ひ、料理品表を差出した。予は何でも宜しいと謂つたが、頻りに何か指定せよと求むるから、よい加減のものを二品(肉と吸物)を誂へた。持ら來た處を見れば驚くべし、大盛り六品。その誂へたは紅焼肉といふ名であつたが、脂肪七八分の豚肉で餡掛、容積は一升以上もある。手が着けられない。その他も皆山盛りで、二三驚を喫したのである。鶏卵の煎つた(之も鶏卵六七箇)のと吸物で、通常の米飯を食ひ、夕食を濟ました。必らず食られるに相違ないと思つて居たら、夕食の請求は彼註文しただけの八十錢である。他の副食物と飯の代は請求しない。手を着けなかつたからであらうか、奇妙な制度もあればあるものと思つた。支那旅行は數人ですれば、一人の外は飯だけの代を拂へばよいと聽いたが、此事であるわいと思つた。室代も一人を増す毎に二十錢の増額を求むる由が書いてあつた。

此夜の暑い事は甚しかつた。旅館で幾度も湯を取換へて呉れたから、幾度も體をふいた。愈彼寢臺に登り、帳を引き寝ぬ。暑くて輾轉したが、疲勞のた

めに忽ち熟睡した。夜半に目を覺せば、驚くべし體は蚊のために存分に熱されたのである。これは寝る時に蚊を逐ひ出さずに寝たので、眞の蚊屋に寝たのである。それからバタバタとはたいて寝ぬれば、又熟睡して朝になつた。無言の一夜も之で過ぎたのである。今度の食事は昨夜に懲りて麵包とミルクとした。之は多量に取りおきて晝食の材料としたのである。支那市街を歩めば我おでんの様な物などデク〜と煮て居り、支那人が口の周邊を黒くして食つて居るなどあるが手はつけられない。我國に於ける南京料理といふは、西洋料理法を加味したらしい。我國でする南京料理ならば食ふ事が出来るが、支那では決して食事する事が出来ぬ。支那生活には料理其他に於ても上等と下等がとあつて、中等はない。

支那旅館の一夜も過ぎた。取扱振には遺憾はなかつたが、大に驚愕したのはその便所である。便所の位置は、大抵考へればわかるが、此旅館のはなか〜譯らない。やつとの事で、物置の一隅にあるを捜し當てた。構造は驚くべ

く粗末である。先づ戸を開けば中に八疊大の室がある。その半分が二尺位の高さに板張になつて、その板は鉋が掛つて居るか居らぬかと疑はれる位の板で張つてある。而して之に徑一尺七八寸の圓い穴があけてあつて汚れて居る。之に尻を附けて三人で顔を見ながら同時にやる仕掛である。小便所は井形の大甕で、之をその一隅に置いて自由に出入して用を達す。實に言語道斷である。その座敷の美麗なるに比して軒輕も亦甚しい。

此日の日程は吳山と錢塘江である。先づ吳山に登つて錢塘江方面に出でんとしたが主人が「時間が多分に懸る。錢塘江畔の六和塔に登臨すれば吳山の眺望と同様である」と筆談す。細かい事を問はんとするも彼は懸腕直筆で、正楷に書くのであるから、容易にはか取らない。やがて料理番らしいのが出て來つて、爽かに日本語で語る。これは地獄で佛の思がした。頻りに語れば大勢集り來つて口を抑へて笑つて居る。女性は一人も居ない。九時頃旅館を辭して、東五六町で清泰門を出た。門内に大停車場を建築して居つた。門外の橋を渡れば忽ち

此日の方面

地獄で佛其四

清泰門停車場

杭州地圖を寫す

開口に向ふ

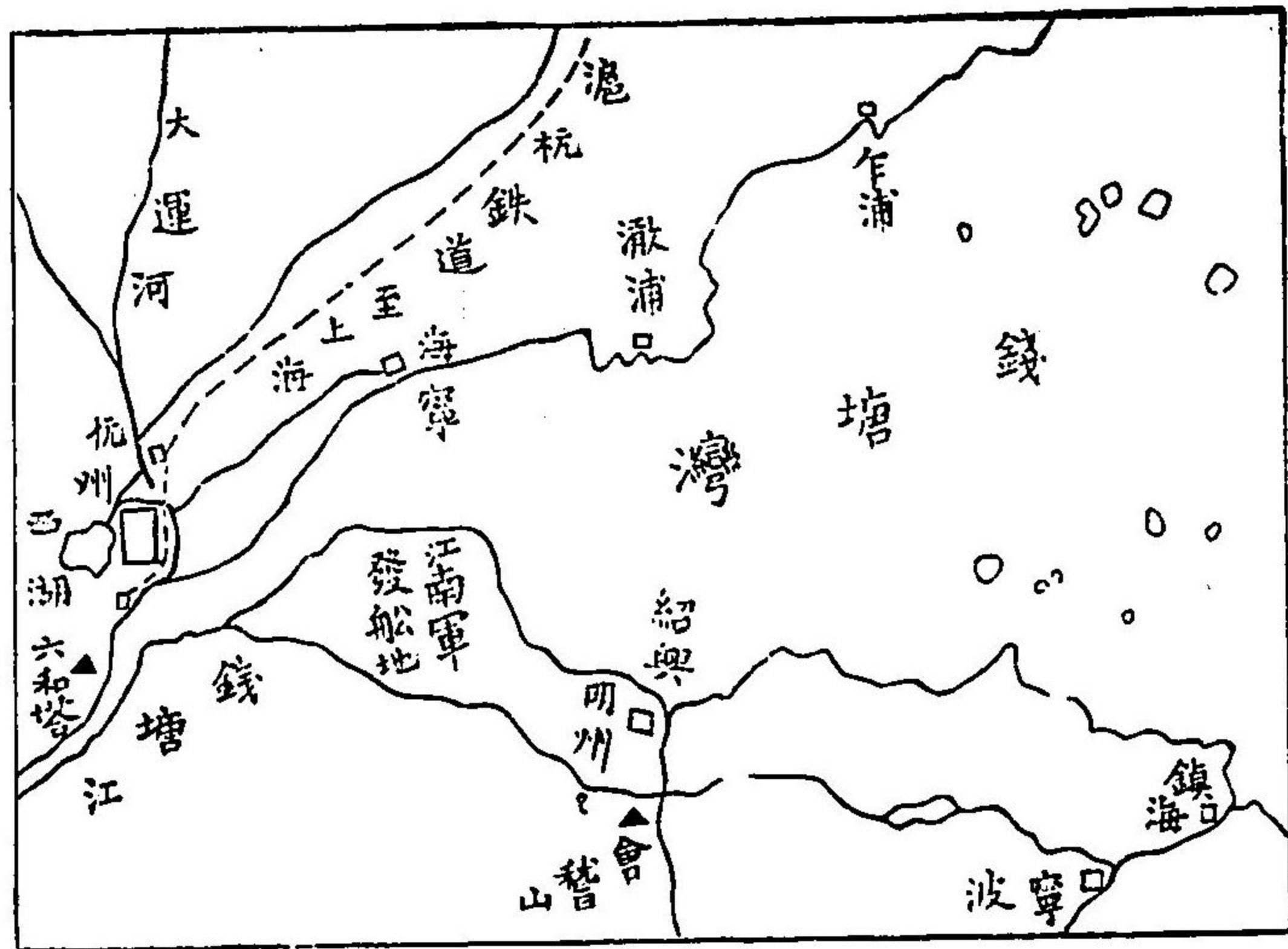
華開口の繁

清泰門停車場に出た。これは杭州發着の起點である。

清泰門停車場で待つこと一時間許。その待合室に杭州附近の立派なる地圖の額が掛けてある。これは鐵道敷設の際の實測圖で、手でひいたものである。之を外づして熱心に模寫した。支那人は環視して居つた。何と思つたであらうか。

午前十時過の汽車で、南の方江汗即ち開口に向つて出發した。暫らくは杭州城の濠外を通る。やがて右前面十町許に吳山が顯はる。蜿蜒たる大城郭はその後を繞る。中腹には寺院亭榭櫺比し、茶亭など軒を並べて崖に倚る。「立馬吳山第一峰」の句を想ひ出さざるを得ない。二里許で開口停車場に着く。

開口は錢塘江に臨みたる杭州附屬の港である。杭州との間に小平野があつて人家が斷續してある。若し錢塘江に船舶の出入が頻繁であれば、無論杭州の繁華は此方面に向ふ筈であるが、意外にも此江の運輸は盛んでない。併し停車場附近には大規模の倉庫など幾棟も建築中であるを見れば、將來の發達は思ひや



錢塘灣附近圖

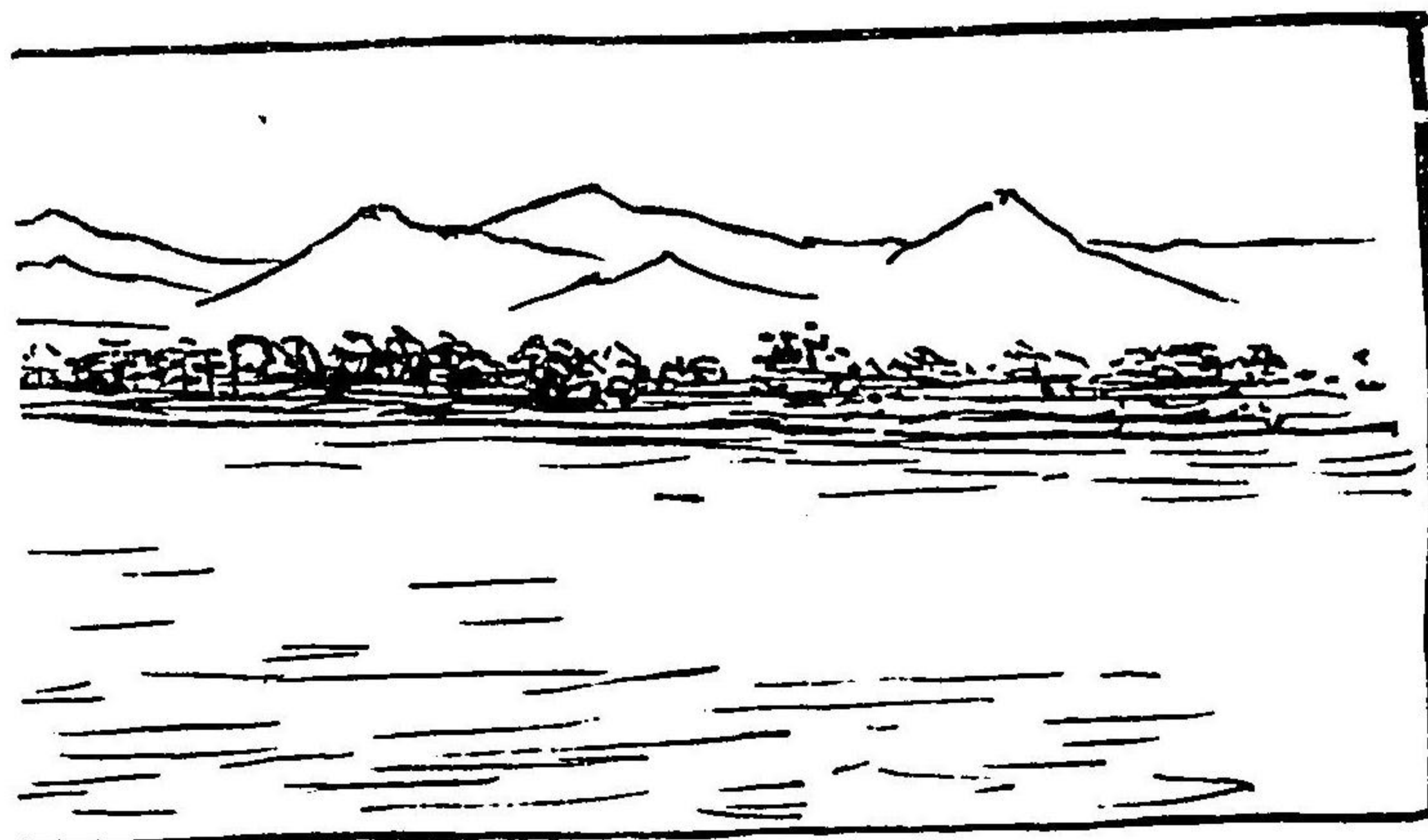
らる。

錢塘江は、或は浙江ともいふ。源を安徽の南部に發し、浙江省の中央を貫き錢塘灣に注ぐ河で、長さ三百二十哩。その大さ鴨綠江に匹敵して居る。此邊の川幅八町許。楊子江とは異つて略澄んで居る。對岸は砂山で、雜木林がある。上下する船舶は甚だ少く、風光甚だ寂寥である。此江に有名なる地文學的現象がある。それは暴漲湍といふ津浪で、毎年秋の大潮の頃に、美麗なる瀑布狀をなして江口に

より上流に向ひて進み來るのである。之より十餘里下流なる海甯を以て最も好觀潮場とするが、此邊にてもよく見得らるのである。或歳の十月十日には、海甯の前を十一尺の高さにて、一時間五里の速度で走れりといふ。その壯觀想ひやらる。その季節には船は警戒して出ぬのである。

開口より西の方、江と山との間の小平地にある道を進みて六和塔に向ふ。此道路は本省の大街道であらうが、幅は三四尺許。切石とも丸石ともつかぬ様な大石を並べてある。民家は散在して炊烟を揚げて居る。地藏尊もある。稻の繁茂は本國と變らない。いと長閑なる中を孤客飄然として進めば、本國に居る想ひがする。叢より非常に大きな蜥蜴が飛び出でしを見て、始めて支那に居る心に立ち返つた。茲は昔の越の國で、南の果であつた。韓愈の左遷せられた潮州はこれより猶南で、瘴毒の地などと謂はれたが、此邊も半ばは左様に思はれたのであらうなどと考ふる中に六和塔に達した。

六和塔は開口停車場を距ること半里餘。江畔の山の半腹の開元寺の境内にあ

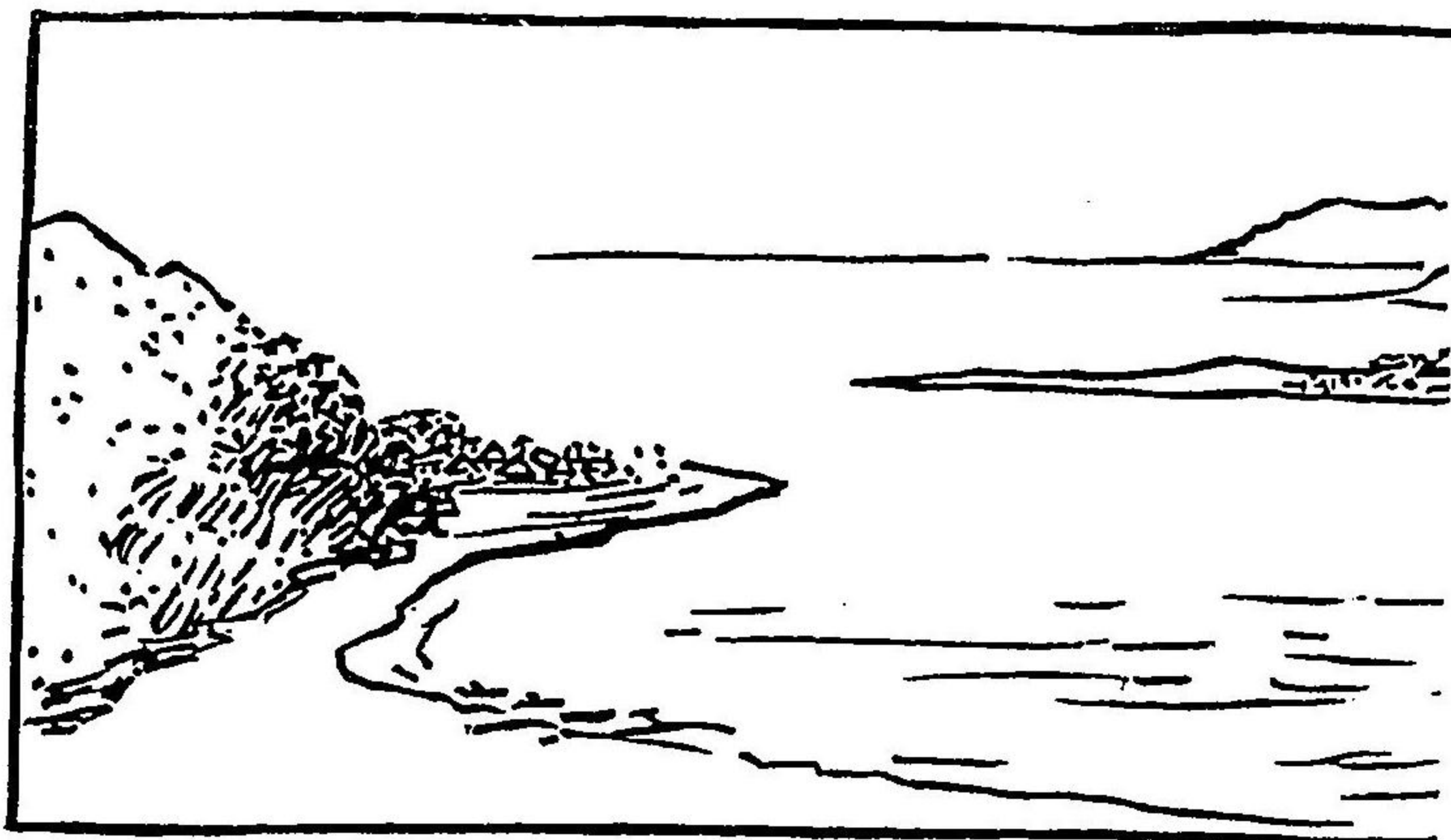


六

和

塔

る。開元寺の殿堂亦見るべきもので、木材は皆銅箔を以て塗り、大雄寶殿などと額を懸くるなど、道了權現と同じである。六和塔は基礎が徑十二三間、十三重の塔である。木と石とで構成せる巨大なるものである。まだ百年には達せぬ建築らしい。中には佛像その他彫刻が陳列してある。十三層に登つて一望すれば、羽化登仙の想をなし、眺望實に絶佳である。錢塘江の上流は、高山峻嶺重疊し、その間を錢塘江が迂回して流れ来る。東南面即ち對岸も亦山嶽連互し錢塘灣に盡く。山の先よる台州は天台山のある處、小田原外郎の祖先や、方孝孺の出



望

眺

た處である。有名なる會稽山は二三十里の彼方にあつて、鎌倉から伊豆半島を眺める様である。略山の位置を明らかにする事が出来る。これは高からざる山で、其西北の麓に紹興府がある。之に近き越王臺が越王句踐の居城の址である。句踐はあの邊で嘗膽をやつたのかと思へば、感慨無限である。謠曲船辨慶に、
傳へきく陶朱公は、句踐を伴ひ、會稽山に籠り居て、稱々の智略をめぐらし、遂に吳王を亡ぼして、句踐の本意を達すとかや。
とあるを微吟して見たが、茲では大に興が

ある。さきに吳王の地を踏み、今は越に來る。想ひは二千四百年の昔に歸り、感慨無限である。而してその得意なりし越王の後も、百餘年にして楚に亡ぼされ、槿花一榮に過ぎ去つた。詩人李白をして、

越王句踐破吳歸。義士還家盡錦衣。宮女如花滿春殿。只今唯有三鷓鴣飛。と謠はしめたのである。而して山下の沃野にある紹興は人口二十萬。紹興酒の産地で、拔山蓋世の勇ある項羽の起つた處である。楊子江の船中で、紹興出身の學生に「紹興に遺跡の存するありや」と問へば、「何物もなし、唯會稽の蘭亭にて、三月三日禊を修するは古來變らぬ」と答ふ。十八史略及史記に、

籍字羽。少時學書。不_レ成。去學劍。又不_レ成。梁(叔父)怒。籍曰。書足_ニ以_レ記_ニ姓名_ニ而已。劍一人敵。不_レ足_レ學。學萬人敵。梁乃教_ニ籍兵法。會稽守殷通欲_ニ起_レ兵應_ニ陳涉。使_ニ梁爲_レ將。梁使_ニ籍斬_レ通。佩_ニ其印綬。遂舉_ニ吳中兵。得_ニ八千人。籍爲_ニ裨將。時年二十四。

秦始皇游_ニ會稽。渡_ニ浙江。梁與_ニ籍俱觀。籍曰彼可_ニ取_レ而代_レ也。梁掩_ニ其口。曰。

毋_ニ妄言。族矣。梁以_レ之奇_レ籍。

秦始皇の此地に遊びし頃は、西湖と浙江と相通じ、その乗船せし處と傳ふる秦皇纜船石といふ處が西湖畔の日本領事館に近くある。これより對岸に渡れりとすれば、正しく開口の地點であらう。項羽は此邊から見たではあるまいかなど想はれた。項羽攻戰八年、垓下の一戰にうち負けて、南京の對岸の烏江の岸で自ら刎ねて死んだ事は、既に語つた所である。

歴史はまだある。奈良の朝、八重の潮路をうち越えて入唐せし安倍仲磨が乗船歸朝せんとしたる明州は、矢張紹興の邊ならんといふ。仲磨告別の詩に

銜_レ命將_レ辭_レ國。

非才忝_ニ侍臣。

天中戀_ニ明主。

海外憶_ニ慈親。

伏奏遠_ニ金闕。

駢驂去_ニ玉津。

蓬萊鄉路遠。

若木故國隣。

西望懷_レ恩日。

東歸感_レ義辰。

平生一寶劍。

留贈_ニ結交人。

天の原ふりさけ見ればかすかなる

三笠の山に出でし月かも

は人々に膾炙して居る。送る人王維の詩に

送_三秘書晁監還_二日本_一

王 維

積水不可極。安知滄海東。

九州何處遠。

萬里若_レ乘_レ空_二

向_レ國惟看_レ日。

歸帆但信_レ風。

鼉身映_レ天黑。

魚眼射_レ波紅。

鄉國扶桑東。主人孤島中。

別離方異域。

音信若_レ爲_レ通。

友情掬_レすべし。仲_レ鷹は元正天皇靈龜二年十六歳にて遣唐留學生となり、玄宗

に仕へて秘書監となり名を朝衡と改む。詩人李白王維はその友であつた。孝謙

天皇天平勝寶十五年遣唐使藤原清河に従ひて歸朝せんとし明州を發したが、暴

風に遇ひて安南に漂着し、復唐朝に仕へて、多恨の才子は故郷悵望の中に七十

歳で彼地で終つたのである。蓋し此邊は遣唐使、留學生の船の發着せし處であ

つた。即ち船は本邦を發し五島を離れて茫茫たる大海に出で、比較的_二目標の

高山を早く認むべき寧波、紹興を指し、これより大運河によりて北に進んだの

である。(章末參照) 弘法大師の學びしは長安であるが、一時南京に足跡を印せ

遣唐使の
航路

しも此路によつたからである。當時船舶の構造、航海の術幼稚で、海上の險難意外に多く、遣唐使の復命し得たものは寧ろ珍らしかつたのである。併し新知識を得るに急なる、それ等の事を顧みる暇がなかつたのである。

旅人の宿りせん野に霜降らば

我子はぐくめ天の田鶴むら

の歌は當時の慈母の歌として殘つて居る。

又紹興を中心として此海岸より弘安の役に范文虎が十萬の江南軍を率ゐて出たのである。范文虎はもと宋將で、賈似道の黨である。楊子江畔の安慶府を守つて居つたが、元將伯顔に降りてその用をなし、我弘安二年(南宋の滅びし歲)その部下周福樂忠をして我國に牒を上らしめた。北條時宗命じて之を博多に斬らしめた。弘安四年元軍二道より來寇す。高麗軍四萬先づ博多近海に至る。范文虎兵十萬に將とし、右丞相阿刺罕と兵を杭州附近に集め五島に沿ふて來た。本邦軍の勇猛を憚り策戰せる中に颶風に遇ひて大敗し、死する者甚だ多く、文

范文虎

虎漂流すること一晝夜、僅に生きて歸つたのである。その時此海岸の混雜は甚しがつたらうと想はれた。

猶此邊を中心として倭寇が大に荒らした。明の始頃より嘉靖中最も猖獗を極めた。先づ崇明島に據り、楊子江下流の兩岸を侵した。上海、通州、蘇州、揚州より、奥は南京、蕪湖に至り、南は松江、嘉興、乍浦、海寧、紹興等は其の害を受けたる主なる地で、福建、廣東の海岸にも及んだのである。多きは六千人の團體であつたといふ事である。中央政府の事業でなかつたから赫々たる事歴を後世に遺すことの出来なかつたのは遺憾の事である。元寇の復讐の意味を有つて居るらしかつたので、豊太閤が明を破つてから急に罷んだのである。

六和塔上の感慨は右の如く多かつたが、此外に猶一つ感情を衝くものがある。それは旅行も愈これ迄であるといふ事である。眼を凝らして山川に別を叙し、開口に歸つて午後一時五十七分發上海行の急行車に乗つた。煤の如き赤褐色の

煙を吐いて走る。上海まで約六十里、二等賃錢二弗九十錢である。

開口發	午後 一、五七	支那里	二等賃金
清泰發	二、三〇	二一	一八
艮山發	二、四五	三四	二七
嘉興發	五、〇〇	一九七	一、六四
楓橋發	五、五〇	二五四	一、九一
松江發	六、三〇	三〇〇	二、三六
莘莊發	六、五九	三三五	二、六二
上海着	七、二三	三六五	二、九〇

車中で杭州の絹商人と筆談しながら進んだ。峽石といふ山は、線路の東近くあつて、塔などあつて景色がよかつた。其他は全線一面の平野で村落散在し、雞鳴狗吠相聞こえて居る。嘉興府は人口十萬。支那人中最も遊惰の民といはる。城郭を繞らし、水路縦横に通じて商業繁榮である。松江も同様に城郭を繞ら

してある。茲は上海縣を統治する松江府のある所で、赤壁賦に巨口細鱗。狀如松江之鱸とあるは之である。通過する處は殷賑なる村落で、人を見ること甚だ多かつたが、遂に仕事をして居る人を見ない。手を束ねて茫然として汽車の走るのを見て居る者許りであつた。

途上の植

植物は至る處楊柳で、樹木の過半を占めて居る。杭州では大なる楠など見た。車窓處々で松を見た。支那には松はないと聞いたがさうでない。或は近年移植したもののか。高き木はあるが皆細長い。雌松許である。風致ある大木となつて居るものなど全くない。彼絹商は「日本では松が大きくなつて風景は松によるさうです」など語る。驚ろきたるは田畑の畦にある棺桶である。これは南京上海の間でも多く見たのである。處によりては一望眼に入るもの數十。これは人死すればこれを寢棺にし、方角を占ひて之を其方向の田圃に置くのである。而してその棺は、柱の如き材木を併せて作りたる丈夫なるもので、之を畦の傍に置き、白堊を以て周圍を塗り、上を瓦にて掩ふ。而して喪中三年間斯くして置き、

郊外の棺

祭典を行つて白骨を土中に葬るのである。中等以上の家にあらざれば墓表を立てぬ。かくて土饅頭が平坦となれば、忘れて仕舞ふ。兎角支那の德行には形式が多い。人死すれば泣男を雇つて慟哭せしめ、又土中に葬るは、孝子の情として忍びぬといふ意味で、三年間葬らないのである。かく棺を野におくは、中等以上の家であるといふ事である。改良せねばならぬ事である。

上海に着

七時二十三分上海に着く。大都の光焰天を焼く。一里許で黄浦灘に出た。これより腕車にて上海小學校に歸る。「愈終りました」とて迎へらる。

允澎入店記

- 日本國寶徳三年辛未(一一一)足利義政十月二十六日遣唐專使允澎等辭京。
- 十一月九日夜半有東風二船出兵庫。
- 壬申正月五日船至筑前博多。
- 九月五日朝發平戸午至小豆大島。
- 二十一日船頭等曰今年不可有風也。待春可乎。
- 癸酉三月十九日諸船早發大島。走四十里。日未晚至五島奈留浦。
- 三十日有風。午後一號船開洋。類船七艘從之。一晝夜走六七十里。

四月一日類船只見三帆于六七里外。
二日衆人皆醉我亦醉。

三日午前無風。船衆默禱。青嶋一隻匪船。好風滿帆。

四日鷹來息桅上。午後海水少濁。水夫曰已入唐地。

五日早朝一夫見山曉到此。或曰茶山。曰佛頭山。

六日午至補陀羅山詣觀音。

二十日平明達寧波府。

第十六章 歸途

告別 最も善きさうなる車夫 滬上青年會 公園の音楽 井手氏來
訪 乗船解纜 黃海の船上 長崎の檢疫 本邦の風景と人情 車
上の風雨 歸着

八月二十二日 明日正午出帆の筑前丸で歸途に着くのであるから、此日はその準備をした。午後は雑談に日を消し、午後は告別に出懸けた。先づ總領事館に至れば、丁度團體の客の來た處であるから、浮田副領事に面會し、上海日報

告別

最も善き
さうなる車
夫

社に至つて井手氏に告別し、深くその厚意を謝した。次に上海公園に出でて茲で暫らく休憩した。門を出づれば數十人の待合車夫が居る。これ迄支那車夫に何時もねだられて甚だ悪感を與へられたから、歸朝に際しては善き車夫の車に乗り、愉快に彼等に別れを告げんと考へて順良なる車夫を捜した。十五六歳の紅顔の美少年を捜し出して、その車に乗つた。彼は一生懸命に牽く。學校に到着し、常には二十仙與ふる處を、今日は三十仙與へて見たが、矢張支那人の子である。例の強請で手も着けられず、「あの聲で蜥蜴食ふのかほととぎす」の句を思ひ出さざるを得なかつた。

夕刻より酒匂氏鈴木氏と散歩に出懸けた。先づ滬上青年會を尋ねた。これは虹口にある煉瓦の三層の大層である。平生の事業としては、青年補習教育と雑誌の發行である。此時は英語の夜學が二組あつた。八千の日本居留民。多くは居住後年が淺いから、中流以下の者にありては交際の機會少く、未だ十分なる一致が出來ぬ。徒に縣人會など有し、割據し居るなど甚だ遺憾である。此際に

滬上青年
會

於て此青年會は甚だ必要であり、又有望なるものと思はれた。

上海公園に至れば當に洋々たる音楽の最中である。白装の歐米人椅子に倚りて之を聴く者六七百人。日本人はその一割にも達せぬ。居留民の半數を有せる日本人の斯く少きは、生活状態を異にせる故か、趣味を有せぬ故か、其他如何なる原因があるかと考へた。太馬路方面を散歩して歸る。

八月二十三日 愈出發の當日となる。朝早く起き出でて旅装を整ふれば、井手氏來訪せらる。遠路の訪問感謝の辭なし。鈴木氏に送られて出發し、楊樹路の郵船會社の碼頭より乗船す。彼上陸碼頭を距ること六七町の東にある。郵船會社の第二碼頭である。酒匂氏も見送らる。此船は往航に乗りたる船で、手が支那内地旅行中に横濱迄往復したのである。船員には而識者多く、笑を含みて挨拶するなどうれしかつた。後れて來る乗客が腕車を下るや車夫はねだる。客は之を突き飛ばすなど、續々として見え、宛然回り燈籠を見る様であつた。十二時半錨を抜いて出帆す。茲に於て大陸に離る。友の振るハンカチーフもや

がて煙霞に没す。

室に歸れば、三四の日本人と、一人の英人と、三四名の清國留學生が居つた。二度目の見物は感興がないから談話に耽つた。日没頃には大陸を餘程離れたるらしく、日は海面に没す。

八月二十四日 黄海静なり。談話の興深し。

八月二十五日 目覺むれば既に長崎の外港に碇泊して居つた。検査を受くるなりといふ。暫らくにして醫師三名來る。中等船客十名許の中、二名は別室に導かれて診察を受けしが異状なし。他は顔色を眺めたるのみにて去る。船は進みて内港に碇泊す。先發船はチブス患者を生じ、茲に八日留められたが、丁度發する處であつた。午後四時出發門司に向ふ。

八月二十六日 朝門司に泊し、正午出發す。米二千俵を積み込む。往航には暮れて眺めざりし瀬戸内海西半の景色を見る。

八月二十七日 午前八時神戸に入る。予は上陸して明石、舞子、須磨を遊覽

して歸る。風景清洒、人情純潔實に旅情を一洗するに足る。茲に來つて想へば、支那の景色は鈍大である。而して人情は唯醜陋なる利己である。本邦に歸つて風景明媚、人情の妙味が横溢して居るを感じた。

八月二十八日 夜來風烈し。防波堤を打ちて碎くる波が猛烈である。出發以來嘗て風らしき風に遇はぬに、最後に困むの恐なるを思ひ、之より上陸する事とした。午後八時過の汽車にて發す。河泉の山脈は白雲に包まる。山科に至れば狂風白雨を捲いて來る。琵琶湖には白波みなぎる。馬場にて下車し、義仲、芭蕉の墓に詣で、次の列車を待つて乗る。名古屋にて日暮る。一睡すれば天龍川の邊、洪水にて堤防の破壊せるを窓下に見る。又一睡して覺むれば、夜中ながら薩埵の富士おぼろげに見ゆ。

八月二十九日 午前六時四十三分鎌倉着。郷國の風物依然たり。

第十七章 南清漫遊の感想

- 批評の價値 批評の基礎 南清の地勢 一、平坦 二、長江の偉大
- 三、風景 統一的地勢 支那の國民性 一、利己的 二、虚偽
- 發表上 文學上 交際上 三、獨立自營 四、不潔 五、その原因
- 簡易生活 五、無頓着 頑固にあらず 建築物の保存 六、文弱
- その原因 七、諦むる心 支那の國家 君主に對する感 彼我國體
- の差 官吏に對する感 才取主義 自由の民 國家道德の破壊
- 近來の迷妄 風俗 日本人の勢力 列國の勢力範圍 日本居留民の
- 發展 居留民の前途 長江上の勢力 將來の經營 本邦より及ぼせし文化 我國民の覺悟

漫遊中の感想は、紀行文中諸處に書いたが、茲には概括して述べん。感想を述べんとすれば何れ批評する事となる。唯一瞥したるのみにて批評することは甚危い様であるが、それには亦面白い處もあらうと思ふ。蓋し詳細の調査は時日を費さねば出來ぬ事であるが、清新なる感興は却つてその觸目したる刹那こそ深きもので、二度三度となれば事々物々平々凡々となりて、何等の感興も惹

南清の地勢

かぬのが常である。予はその第一の感觸を書いたのである。若し二度三度といふ事になれば、自然の風景、人情の異など何等の注意をも惹き起さぬ事になるであらう。故に委細の調査研究は之を他人に譲り、茲には予が短き旅行中の感觸を述ぶ。

南清の地勢 地勢の廣大なること、長江の偉大なることは、予が感じたる主なる事である。内地に於ては、沿海を航海して陸を見れば必らず山である。海上より見て山といふものを去らば、陸地といふものはない様に見える。然るに南清にありては、海上より見れば陸地は一抹の線で、太陽はその線に没するのである。内地に入るも上海南京間九十里の如きは砥の如き平地で、僅に波浪状なる丘陵があるのみである。南京より上流百餘里の間、右岸は蘆荻打續きて、その背景なきには驚かざるを得ない。湖北湖南にかけての大盆地、亦然りである。

二、長江の偉大

長江の偉大なること、これ亦驚くべきものである。長さ三千哩、八十餘萬方哩の水を合せて溶々として海に朝する勢甚すごし。濁流滔々として天際より横溢し来る光景は、實に壯大である。護岸工事殆んどなく、太古その儘に自由に流るる大江、見るからに壯觀である。

三、風景

此廣大なる平地、壯大なる長江は、實に南清の風景を偉大ならしむるのである。劃一ならしむるものである。其小區域の景は、唐畫の江村の景、あれが寫生である。その大なる景に至つては、本邦にてはとても類例を見ることが出来ぬ。然るに到る處相似たる景で、甚單調である。樹木も六七分は楊柳で大木は少ない。これも單調の原因である。唯西湖は小區域の景であるが、これはあまり鮮麗で箱庭的である。大體に於て予が漫遊せし地域は風景の變化が少ない。奥に進みて巴蜀に入れば、茲には高山絶壁の風景があるのである。

地勢を見て思ふことは、地勢の平坦と、大河の通ずる事よりして、勢力の分立の出来ぬ事である。戰國時代七雄の割據せしが如きは寧ろ例外である。その際ですらも、長江一帯は楚の一國であつたのである。稍地勢を分つは黄河の谷

統一的地勢

と楊子江の谷とである。秦が黄河の谷を越えて楚を併呑すれば、項羽楊子江の

谷に起つて之を恢復し、漢の高祖黄河の谷に起つて大業を立つるといふが如く、
稍その勢力の分割をなして居る。南北朝の暫らく分立せしもこれである。併し
ながら兩河の間には、著しき山脈はない。故に忽ち統一することになる。支那
と日本との地勢を比ぶれば、學校の講堂と、數奇を凝らしたる住家の様なもの
である。支那は統一的の地勢である。數國は併立せぬ。唯人種の差のために併
立することはあらう。若し列強の分割となつても、地勢があまり統一的である
から、問題は頻繁に起ることであらう。

支那の國民性 支那の國民性の最も著しきは、利己的であるといふ事であ
る。凡ての人事的現象は之より演繹することが出来る。他人の幸福、國の利害
などいふ事は念頭になく、唯利己の一點張である。物事に冷淡である彼等も利
の問題となれば血液は沸騰し、怠惰なる彼等も勉強家となり、利の爲には死を
も辭せず、死して而して悔いざるは支那人の通性である。協同生活によりて人

支那の國民性
一、利己的

生の幸福を享受し得らる事は夢にも悟らず。協同生活を無視する事によりて自
己が當然迷惑を蒙らねばならぬ事まで頓着せぬは、實にあさましきものである。
唯貿易商が外人と折衝して得たる經驗によりて、信用を重んずるに至りしは、
全く利益のために教へられたので、此點に於ては我國の貿易商も及ばぬ處があ
ると評せられて居る。

斯く極度まで利己主義の國民であるから、己の心を以て人を忖度するにより
て、人も亦自己に損害を及ぼす者と思ふのである。「人を見たら泥棒と思へ」と
は、實に支那人が人に接する心状態であらうと思はれる。人を欺くは欺く者の
罪ではなくて、欺かれたる者の馬鹿である。盗む者、盗まれたる者も同一であ
る。故に虚偽たること、盗みたることが暴露すれば、日本人ならば赤面すべき
事を支那人は「しくじつた」と笑つて居る。故に家族間でも互に盗みあふから、
互に箱と鍵とを持つて居る。偽は大言といつて悪とは思はぬ。國際談判の如き
も個人間と同様で、決して當てにはならず。窮する迄は平氣でやる。相手はそ

二、虚偽

の圖々しいのやら、時日の遷延するのを焦らつて、遂に談判に負ける事がある。故に人は支那人を稱して外交に巧妙など評するが、斯くするのが果して外交上の眞の勝利であるか考へ物である。

支那人の嘘はあらゆる方面に擴がつて居る。思想の發表、文學多くは嘘で出来て居る。孔孟は當時の國民があまり利を重んずるから眞面目になつて之を排斥したのであらうが、後人もその眞似をして、口を開けば直に利を排斥するが、自己は極端なる利己主義である。これ實に心と口との矛盾である。又その思想と文字文章とが一致しない。思想は全く別なる文字文章によつて表彰せらる。「小便無用」といふ意味を「君子自重」と書き、湯屋の看板を「金雞報曉湯先熱紅日未昇客滿堂」など書く。これ實に心と文字との懸隔である。文學に於ては嘘は更に甚しいので、白髮三千丈の如きはその例である。支那人は外交的辭令に巧みなりといふ。成程これは儘に本邦人などの及ぶ處ではない。容貌を和らげ巧みに人に近づき、諄々として語るなど實に感心なものである。然るにその嘘

には驚く。往航汽船で三四の支那人と語りしに、彼等はちきに「何れ上海に参れば御旅館へ伺ひます」などいふ。嘘なる事は明瞭であるが之を大膽に言ふ。驚き入つたる事である。故に誰も始めて支那人に遇へば快感を覺ふるが、永く友情を續ける事は甚少といふ事は、予が語れる在清の日本人から皆聞いた事である。

斯く個人的であり、嘘をいふ事を何とも思はぬ國であるから、自ら恃み、自ら立つてなければ生存は出来ぬ。國家の力に頼らんとする者はない。社會の保護を受けんと考ふる者はない。そこで獨立自營で世を渡らんとするのである。その自力を恃む精神の雄豪なるはとも本邦人の及ばざる處である。それが爲に如何なる苦痛にも堪へ、如何なる賤業をも辭せず奮闘するのである。即ち本邦人は團體(國家、家族)の力によりて成功し、支那人は個人で成功せんとするのである。日本船に比較しては二三倍もある帆を擧げ、見るも危険なる仕事をなして死して悔いぬのである。此状態にて支那人は世界の各地に擴がり、偉大

なる蕃殖力を有つて居るのである。即ち支那國は滅びても支那人は滅びぬ。斯く獨立自營で奮闘するも、其目的は人間の本務の自覺から起るのではない。多くは飲食、色慾、賭博から起るのである。精神的趣味もなく、自然の風景を愛する念も薄い。故に土地豊饒、氣候溫和で、生活に安樂ならば、苦しんで働く者はない。江南地方の如きは、多くはその人民遊惰である。支那人の個人的なるに次ぎて特殊なる性はその不精なることである。無頓着怠惰にして物を等閑にする事である。支那人の不潔なる、無頓着なる、頑固と見らるゝは全くこれによるのである。

支那人は恐らくは世界に於ける最も不潔なる民族であらう。日本は世界に於て最も清潔を尙ぶ國で、或は潔癖を有すとまで言はれて居る。故に日本人が支那人を見れば特に甚しく見える譯である。上海に上陸すれば、その脂臭き裸體労働者を見て先づ胸を悪くする。市街に入れば裸體で店番をするを見て實に氣の毒に思ふ。豚の皮剥ぎたるを二つ切りにして、鮮血淋漓たるを天秤にかけ

て雑沓せる市街を通るなど、人をして失神せしむるが、彼等は平氣である。何故に斯る人となつたかと謂へば、その不規律にして無頓着なる性質に原因するのである。猶外界よりは、その風景の荒漠なるは確に原因をなすと思ふ。山は唯うねりたる波状のもので單調なるものである。揚子江、黄河の如きは、濁浪空を排して流るのである。風景のよき處といふも、多くは單調であるから、終には飽き果てる。是を山紫水明の我山川に比すれば實に地獄と極樂との差である。殊にその五六月に於ては、數十日に亙る陰雨の節があつて、人心を腐敗せしむるのである。彼の詩經の「天の未だ陰雨せざるに迨び」の句はこれである。斯る内外の原因が不潔の性質を形成したのである。然れども傳染病など甚しく行はれぬは飲食物に注意して居るからである。即ち養熱せざる物は食はぬ。生水は呑まぬが如き之である。而して此不潔は亦簡易生活といふ事と伴ふもので、彼國の労働者が如何なる不潔にも堪へて、平然として活動するは、之れ世界の何國人も及ばぬ處で、支那労働者の畏るべき資格の一である。

三、無頓

支那人の物事に無頓着なる事は甚しい。博覽會など見物するを見るに、人と語りながら場内を素通りに通る。熟視し研究する者などはない。外國の教師が或眞理を彼等に説けば、彼等は「それは孔孟が既に言つて居る」などと言つて居るといふ事である。佛教でも、耶蘇教でも、回教でも、如何なる宗教が入つても決して衝突しない。無頓着であるからである。顔を赤くして論じた者は、韓退之位のものである。

頑固にあらず

世人は支那人を評して頑固なりといふ。蓋し頑固とは、自ら執ること固きに過ぎて、人の言を容るるに吝なるを謂ふのである。支那人の頑固は決して自ら執る處があるのではない。無頓着である。新奇の品の如きは、無頓着であるから之を採用する迄に留意しない。唯無意味に現状に安んじて改めんとはせぬ。故に有用なる品を與へて、十分に便利なる事を知らしむれば之を用ふるを辭せず。その内地に蝙蝠傘の盛に行はるるが如き、石鹼化粧品など多く入るが如き案外にハイカラなるものあるを見るなどを以ても明瞭である。これ等の品多く

建築物の保存

は皆本邦より入るのである。本邦商人は、先づ或資を損じて彼等に便利なるを知らしめ、然る後確實なる商賣をする方針を採るがよからうと思ふ。無頓着の例は建築物の保存に表はる。彼等は建築すれば其破損する迄用ゐて居る。決して修理はしない。雨が漏れば一方に偏在して耐へ忍び、愈居られなくなれば別に家を建てて住む。故に旅行すれば、舊屋と新屋と併立して、一人で之を所有するを見ることが多い。殿堂佛閣皆此流儀で、少しく舊きものは草茫々の間に没す。

六、文弱

國民性に就て猶一つ著しいのは氣の弱い事である。支那の男子は一見して女子の様に見える。その少老のものは我國の所謂女將に似て居る。軀體が大きいから定めし強からうと思つて居たが、支那旅行中其弱い事にはあきれて仕舞つた。本國に居つては意氣地なしの予も、支那に往つては英雄の様に思はれた。何故に彼の如く弱いか實に不思議である。戦争をやれば大旗を立て太鼓を叩き景氣をつけてやるが實は將卒共に戦ふ氣はないのである。八十萬と號すとか帶

甲百萬などいふも、働く者は幾人もなかつたであらう。その出師するは、實は戦ふ氣はなく、うまい處でよい條件で媾和する爲に多い。日清戦争を始めた時は吾人は大國で畏ろしいと思つたが、あの有様を眞に知つて居た者には決して畏ろしくなかつたであらう。併し斯くは言ふものの、輕蔑すべからざるは勿論である。「勝つて兜の緒をしめよ」といふ諺もある。

戦争の場合に弱いのは、その原因の一は國家組織に歸することが出来るが、平時に於て弱い原因は何であらうか。四千年の曲折ある歴史は、屢人心を根柢より破つて沮喪せしめ、陰氣に陥らしめたるであらう。利己主義であるから、強梗は利益にならぬと悟つたといふ事もある。或は法律が不完全であるから、若し争ひなどせば、思ひがけもなく首斬らるる事もありはせぬかと思ふ（殊に外國人に關することにつきては）ではなからうとも思はれる。外國人に對しては實に弱い。上海の鬚多く丈高き印度巡查の近くを通る時など、全く猫が犬を見る様ですくんで側を通る。互にどなるけれども、叩き合ひはせぬ。本邦の江

その原因

イ、國史

ロ、利己

ハ、法律の不完

戸つ子などに比して實に雲泥の差である。

彼等に一種の性がある。それはよく諦めるといふ事である。車賃を強請る時は満面朱をそいで来る。此方にて大喝一聲し、逆も與ふる見込なしと見れば、心機一轉して氣を取り直し、平然として去り一點の怒りも止めぬ。此諦め方は支那では新國が起り其下に屈伏する毎に行ひ來つたのである。而して死刑の時などにもよく顯はれるといふ事である。明治三十三年北清事件の際に乗じて漢口にて兵を擧げんとして捕はれて殺されたる志士唐才常の如きは、笑を含んで斬られたりとして本邦人は賞讃して居つた。此心を巧みに用ふれば強き軍隊をも養ふべく、一種畏るべき性質である。

國家 孔孟が禪讓放伐を認め、易世革命を認め、已むを得ずとするのみが、寧ろ善と認めて居る國柄であるから、萬世一系の皇室を戴き、血族的關係を以て結合せる吾人日本人より見れば、あらゆる點に於て異色が見える。一英雄、一民族が起つて海内を征服して國を建つれば、征服せられたる大多數の者はそ

セ、諦むる心

支那の國家

君主に對する感

の武力に畏れて屏息す。即ち方に負けたのであるから、力を得れば叛逆（支那にては之を大業といふ。成る程大業である）を企てもよいのである。即ち叛逆の権利は萬民之を有すをいふ事が出来る。その朝廷の何時か滅ぶべき事は何人も信じて居る。又憚らずに語つて居る。「次の天子は多分湖北から出るだらう」と漢口の支那人が言つて居つたが、斯る事は寧ろ通常の事である。孔子ですらも「周に次ぐもの百世と雖も知るべきなり」など平氣で言つて居る。

國內には相反目せる數多の異民族を包括するも、征服者と被征服者との勢力の不権衡から表面の平和を得て居る。我國の如き血族的團結の國であれば「祖先の遺風を顯彰せよ」といふ事が忠孝一致の重大なる教訓であるが、支那に於て「祖先の遺風を顯彰せよ」と言へば九分通りの者は皆刀を抜いて政府に刃向ふといふ關係になつて居る。實にお氣の毒の次第である。我國にては君臣の關係は、父子の親であると共に、君臣の分が明瞭に定まり、君を神聖視して居る。支那では之に反して君を厄介視して居る。國民は惡魔除に税金を拂ふといふ心

彼我國體の差

官吏に對する感

持で税金を拂ふのである。小學校の初歩の教科書には、君といふ字、國といふ字は決してない。國家の基礎確實ならぬは實に甚しいのである。

斯る有様であるから、「政府は人民を保護するもの」、「官吏は人民に便利を與ふるもの」などいふ觀念は、彼等の念頭にはない。唯害をなさなければそれで十分であると思つて居るらしい。官吏は人民の利益を圖るなく、職務に對する誠意を缺いて官職を我利のためにし、偶事業を起せばそれは私囊を肥すに足るべき事業である。斯る有様であるから人民は決して官の保護にたよらない。その民家を見れば、中等以上の者は城郭の如き石壁を以て圍み、盜賊を防いで居る。貧民が亂暴し來れば、米倉を開いて施して居る。或本邦人が「警察に保護を請へ」といへば頭を振り、「米を施して貧民を増長せしめては善くないではないか」と言へば「これ王道なり」と濟まして居つたといふ事は、予の直接に聞いた話である。

支那の官吏の行爲は、それは言語道斷である。總督の年俸百五十兩と聞いて

は其薄給に同情を表したくなるが、三年在職すれば三代は樂に暮せると聞いては、略其消息を知る事が出来る。賄賂を貪り官金を私するは役徳であるとして平氣でやる。如何なる事にもコンミッションを取る。皇族大臣でさへ一身の私を營み、仇敵と款を通ずるなど珍らしくない。斯る有様であるから、茲に請負制度が出来て来た。それは一定の収入額を定めて總督に受負はしめ、之を中央政府に納めしむるので、總督は又その下に請負はしむるのである。故に不平を言はせぬ様に誅求するのが腕利きの官吏である。予は汽船中で清國の或紳士に「彼留學生、父は何々官なり」と謂ひしに、紳士は冷笑して「其位の處では可なり占められる」といふ。此占められるといふ語に多くの意味がある。以上は金錢に對する話であるが、職務に對しても同様である。官吏に休日なく又遊覽することが出来ぬ事になつて居るが、それは不規律なる支那人に守られるのではない。唯表面である。

支那は君主專制の國であるから、官吏は歴制で人民は屈從の有様かといふに

決して然らず。支那には元來階級はない。王侯將相何有種乎で、誰でも天子になる事が出来る。而してその人民は極めて干渉嫌ひの自由の民である。その國民性が不精であるから、規律は大に厭ふ處である。王安石は國家社會主義を立てて新法を行つたが、評判は甚だわるかつた。法三章を約したる漢の高祖は大に歓迎された。今でも多くの事は放任である。租税を課するにも國法では定めぬ。之を自治の一團體たる省に割りつけ、次第に之を下に割りつけ、下級官廳たる縣は、各自負擔額を百姓總代(紳士といふ)の如き者と相談して取極めるのである。汽車停止すれば線路内にて物を賣り、狩獵税なく、禁止地、保護鳥の制もなく、勝手なる處にて勝手のものを勝手に打つ。人に對する無作法も亦これより起る。堯の時の老人が「日出而作。日入而息。鑿井而飲。耕田而食。帝力于我何有哉」と謠つたといふが、之は支那人の理想である。かくて人民は他に類例なき自由(放任)を有し、政府は人民に干渉することが甚稀である。支那人は個人上よりは、簡易生活をなして不羈獨立の氣象強く、概して勤勞

なるなど賞讃すべき點であるが、國家上よりは甚感心しない。屢革命をやるよ
りして、道德の根柢を屢破壊するのである。清の敵は明である。故に南京の明
太祖の陵、北京にある十三陵の如きは、發掘せらるる所であつたのを。大度な
る康熙咸豐帝のために現在に遺つて居るのである。然れども荆棘叢生して誰一
人も之に參拜せぬ。忠臣は恐らくは氣の毒なる愚直者と考へらるであらう。杭
州の岳飛の廟は、我國でいはば湊川神社である。殿堂は立派であるが、本尊に
は兒童がカイゼル髭を附けたるなど滑稽である。見物に来る人は多くあるが、
敬禮などする者はない。予が敬拜すれば怪訝な顔をしてながめて居つた。かく
實に國家心の弱く、政府の事は人民には無關係の事と思つて居る。或日本人が
支那人に向つて「日清戦争で負けたではないか」と語れば「それは李鴻章が負
けたのだ」と答へたといふが、さもあるべき事である。

近來四境を割き取られて、滑稽なる自負自尊心も稍醒めた様子で、清國屈
辱史などいふ書も書店に多く見えた。併しながら上下一致して國歩艱難の際を
切り抜けやうとはせぬ。却つて利權回收熱など生じて、妄りに列強の感情を害
し、事情を紛糾せしむるばかりである。新事業を起すには金がない。諸外國か
ら借金ばかりする。借款などいふ清國特用の新語も出來た。自家の利害より打
算する當路者が多くて、毅然國家を負ふて立つ者は少ない。故に屢書生論に動
かざる。我東京に居る留學生など國事について運動するなど笑止であるが、こ
れ彼國の幼稚で、ききめがあるからである。嚮に我元老院の如き資政院を置き
て立憲政治の豫備をなし、宣統五年には愈立憲政體にするといふ事であるが、
憚ることのない國民であるから、随分圖々しくやることであらう。解體せねば
よい。しつかりやつて貰いたいものである。

風俗 風俗習慣は紀行文中に委しく記してある。茲には唯大略を列記する。

- 一、辮髮 辮髮令は今も勵行されぬが、留學生などの外は殆んど辮髮。
- 二、纏足 廣東婦人(上海に多し)の外は、成年女子は殆んど纏足である。幼
年者は之を行はぬ者が多い。

- 三、衣服 洋服着用者を見ることは甚稀である。支那服は皆無地である。
 - 四、食物 長江流域は米である。黃河流域は麵麩ある。滿洲は梁である。
 - 五、亞片 亞片を吸ふ者は意外に少ない。其習慣に染みし者は分量を限つて許すこととなつて居る。
 - 六、家屋 煉瓦造、瓦造とである。村落には木造草葺があるが、その數少し。奥に入れば入る程日本家屋に似る。
 - 七、道路 我國道に當る者が四五尺、村道は二尺位。少しも手入はせぬ。但し都會は例外である。
 - 八、墳墓 三年間棺を埋めず、野に曝し置くには驚く。
- 日本人の勢力** 支那に於ける列強の勢力を見んに、北境は露國の勢力が瀰漫して居る。南滿洲は日本の勢力地である。山東省附近は獨逸の勢力地である。長江は英國の勢力地である。安南に近き廣東廣西地方は佛國の勢力地である。支那本部に於て、本邦の成功せる居留地は、上海、天津、漢口である。支那の

寶庫たる楊子江の谷にその二を有するのである。而して楊子江の谷は、英國の勢力地であるが、近頃は獨逸が能く住民の嗜好を研究して物産を賣り込んで居る。その力は侮ることは出来ぬ。上海には十七箇國が領事館を置いて商業の競争して居る有様であるから、後進者たる日本は、運命を開くには大に覺悟せねばならぬ。

清國は本邦と一葦帶水を隔てたる隣國である。長崎から七圓半の船賃で行ける。俗にいふ下駄懸で行かれる地で、下女も子守も皆一人旅をするのである。日清日露の戦役を總て、國家の發展するに連れて續々と支那に入り込むので、長江沿岸に於ては日本居留民は歐米諸國の居留民の總數と相頡頏して居る。上海の本邦居留民は、日清戦役の終つた歲には二百五十人、日露戦争の終つた年には二千百人であつたのが今は八千人。漢口は明治三十年に六人で、今では千人を越えて居る。短日月なるにその増加の比例驚くべし。之に反して歐米人の經營は六七十年來の經營である。

然らば日本は大に優勢なるかといふに、惜しいかな、しかに言ふことは出来ぬ。決して人種が劣等であるのではない。財力と計畫との基礎が乏しいからである。本邦人の中には本國に於ける失敗者の、赤裸々で往つた者など多い。又居住後年を経ること尠く、經營の基礎が薄弱である。之に反して歐米人は數十年來相當の資本を却して基礎ある經營をして居る。例へば數多の資を投じて支那人を教化し、以て基礎を確實にしつつある。本邦人は唯自己の經營に傾注し、未だ歐米人の如き經營の地位には達しない。殊に新來の者なれば、互に相知るなく、海外で縣人會など開いて府縣で割據する様な有様もあつて、前途猶遠の感もするが、兎に角此多數の國民が外國にて生活の資を得るだけにても國家の慶事である。

洋々たる長江を上下する大船四十艘、噸數八萬七千噸。これは日清英獨の諸國が競争的に經營して居る。然るに後進の我日清汽船會社は、その十二隻二萬五六千噸を有するので、當にこれ天下を三分して其一を有つ有様である。予は

實に之を痛快に感じた。蘇州より運河を航して杭州に至る汽船、それには一人の本邦人も居らぬが、それも日清汽船會社の船である。本邦政府が年額八十萬圓の補助金を同會社に與ふるは、實に本邦輸出入品と居留民とを保護する所以である。

斯く居留民は増加し、運輸貿易の事業、租界の經營も着々その歩を進むれども、之を英人、獨逸人の經營に比すれば甚だ思はしくない。本邦は地理上僅に一葦帶水を隔つるのみである。加ふるに同文同種の國である。而して東洋の盟主を以て自ら任じて居る。然るに南清に於ける勢力英人に及ばざるは勿動、動もすれば獨逸の壓倒する處とならんとする傾向あるを見れば、更に大なる覺悟を要すると思ふ。獨逸人の如きは支那人の嗜好と需要とを研究し、その模様、形狀の支那出來なるかを疑ふ位の品物を賣込めども、本邦人は需要を研究することと少く、よい加減の品物を製造して送りつけ、賣れざる時は罪を買手に歸するといふ傾がある。蓋し一省内に於てすら風俗習慣を異にする支那であるから、

得意巡りをして需要嗜好等を研究し、大に我對清貿易を盛にするを必要と思ふ。顧みるに本邦の貿易は、國民一人に付十九圓宛の割に當り、支那は僅に二圓四十錢である。若し支那の貿易額の一人分頭を現在の本邦分頭だけに昇すならば七十億となる。その半額を本邦が占むるも三十五億となる。今支那に入つて居る綿布は約七八千萬圓であるが、若し支那人が一人一圓宛需要すれば無慮四億になるではないが。油断をすれば支那に大工業が起つて本邦輸出を絶つのみが逆に輸入する事にもなるであらう。大に覺悟せねばならぬ。

次に思想界に就いて一言する。南京博覽會の教育館に入つて本邦教育法の輸入の多きに驚いた。圖畫の大部は日本風で、その臨本まで日本のものである。手工その他日本のものが多い。これは本邦より聘せる教習と、本邦留學生の歸つて教授せしによるので、教育館内は本邦の眞似の競争である。實に痛快であつた。現今留學生の出づる者の七八割は本邦で現今二千幾百を數ふ。然らば將來の支那は全く本邦思想によつて風靡せらるるかといふにさうは言はれぬ。

蓋し本邦の影響を受けて居るのは外面である。國民性は自負で、近來は排外思想が全國に瀰漫して居る。故に教育館で見たる割には、本邦の影響を受けぬは勿論である。併し目を開けば前にぶらさがつて居るのは本邦思潮である。少しく文明的施設をせんとすれば直にその影響を受けずには居られない。南京博覽會の幹部は皆本邦留學生、中央の資政院を運轉するものも本邦留學生の力が多大であるといふ事である。點滴石を穿つの譬もあれば撓まず倦まず力を盡すことが必要である。斯くするは一には人道である。二には本邦が嘗て文化を受けし返禮である。三には本邦人經濟的發展の素地となすべく、四には政治上の變動に應ずる基礎である。

本文中記載以外に於て旅行に關し特に厚意を與へられたる各位

内堀 維文君 田邊新之助君 笠原 鏡二君 山田 湘南君

附 録

清國旅行上の注意

準備 清國を旅行するには別に旅行免許状の様なるものは入らぬ。「旅行案内」などを見て發船の日を見て出發すべきである。日本郵船會社の船に乗るならば委細の事は東京麴町區有樂町のその本社、その他支店に問合すもよろし。船の室には一等、二等、三等がある。船によつては二等と三等との間に特別三等がある。二等は吾々には贅澤と思はるる位である。特別三等など宜しからう。三等でも甚しくわるくはない。室は支那人とは別である。寄宿舎生活をするのと大體異ならない。研究旅行の團體などならこれで結構である。以上四階級の賃銀の割合は大體四十、二十四、十五、九といふ比例である。

服装 洋服が宜しい。船中生活には和服が宜しい。夏の旅行ならば單衣は二

枚位、下着は二三通り必要であらう。少しくボーイに錢を與へて時々洗濯せしむるがよい。自分でやる事も出来る。

携帶品 楊子江の汽船や支那旅館では、通例夜具を貸して呉れない。そこで毛布を持參する必要がある。蝙蝠傘も必要である。ゼム、仁丹、清心丹、寶丹の如き清涼劑、感冒及び下痢の藥等は必らず持參すべきものと思ふ。尤も船中には多くは醫師が居る。支那内地を旅行する時にはミルクを携ふる必要がある。これは若し病氣に罹つたならば、然るべき處に行く迄之を嘗めて旅行すべきである。又碑を摺るために唐紙、鐘墨など必要である。案内書、地圖、手帳は勿論である。

紹介狀 他郷、他國を旅行するには紹介狀は甚だ必要である。身分を紹介して呉れる人がなければ人を尋ねても思つた様に世話をして呉れない。紹介狀を以て人を尋ね、その人が自己の爲に盡して呉れる人であるならば、又その次に紹介狀を書いて貰ふがよい。何處へ行つても領事館を尋ねてその世話になり、

附 録

清國旅行上の注意

準備 清國を旅行するには別に旅行免許状の様なるものは入らぬ。「旅行案内」などを見て發船の日を見て出發すべきである。日本郵船會社の船に乗るならば委細の事は東京麴町區有樂町のその本社、その他支店に問合すもよろし。船の室には一等、二等、三等がある。船によつては二等と三等との間に特別三等がある。二等は吾々には贅澤と思はるる位である。特別三等など宜しからう。三等でも甚しくわるくはない。室は支那人とは別である。寄宿舎生活をするのと大體異ならない。研究旅行の團體などならこれで結構である。以上四階級の賃銀の割合は大體四十、二十四、十五、九といふ比例である。

服装 洋服が宜しい。船中生活には和服が宜しい。夏の旅行ならば單衣は二枚位、下着は二三通り必要であらう。少しくボーイに錢を與へて時々洗濯せしむるがよい。自分でやる事も出来る。

携帶品 楊子江の汽船や支那旅館では、通例夜具を貸して呉れない。そこで毛布を持參する必要がある。蝙蝠傘も必要である。ゼム、仁丹、清心丹、寶丹の如き清涼劑、感冒及び下痢の藥等は必らず持參すべきものと思ふ。尤も船中には多くは醫師が居る。支那内地を旅行する時にはミルクを携ふる必要がある。これは若し病氣に罹つたならば、然るべき處に行く迄之を嘗めて旅行すべきである。又碑を摺るために唐紙、鐘墨など必要である。案内書、地圖、手帳は勿論である。

紹介狀 他郷、他國を旅行するには紹介狀は甚だ必要である。身分を紹介して呉れる人がなければ人を尋ねても思つた様に世話をして呉れない。紹介狀を以て人を尋ね、その人が自己の爲に盡して呉れる人であるならば、又その次に紹介狀を書いて貰ふがよい。何處へ行つても領事館を尋ねてその世話になり、

又研究の資料を供給して貰ふがよい。上海の様な忙はしい處は例外であるが、内地に入れば居留民は皆厚意を以て歓迎して呉れる。領事館では必らず親切にして呉れる。

言語 英語は上海などでは甚だ多く役に立つ。支那人の大商店、電車などでは大抵通用する。内地に入つても停車場の切符賣などには通用す。清語を學習して行くことが甚必要であるが、予は少しも學習せずに出發した。途中では少しは覺えたが、瘦我慢をして之を遣はずに旅行して見ようと思つた。即ち筆談で旅行しようと思つたのである。

然るに支那人には、文字の教育は甚だ行き渡らない。百人中の一二が僅に日常の手紙を書く位のものである。而して日本人も漢文を書くことは容易でない。然るに茲に便利なる事は同文の國である。即ち同じく意標文字を用ゐて居る國である。故に食物といふ文字と欲といふ文字があれば、その位置は何處にあつても腹が減つて食物が欲しいのであるといふ事がわかる。それ故に漢文を知ら

ずとも筆談で大體の用を辨する事が出来る。これは意外に便利なる事である。予は全く筆談で學校も參觀し、船中で多くの人と語つた。その員數四五十人に及ぶであらう。今左に蘇州(姑蘇)中學堂を參觀し、その舎監と筆談したる一節を擧げむ。

謹聽閣下之姓名。

錢保泰。在校中任監學。

今次之旅程知貴邦人士多矣。如陸軍少將程氏。於江中舟中面晤有談。予甚喜焉。

弊校規模太小。一切未能完備。望指教之。

不然。蓋不能得學徒之多。有以乎。

中學學生甚難招。因高等小學畢業人數不多。

城中之中學幾校。

弊校之外尙有公立中學一處。

校中學徒凡幾人。

約有一百餘人。

多謝。願貴下亦來遊弊邦乎。

甚望。閣下到此再來。

予再遊之日。由乎津浦鐵路入山東。而欲尋孔夫子之址。即上於北京也。

閣下從前曾到弊國否。

予也初遊。而視貴邦興廢之蹟。察孔夫子之所說矣。貴邦之史實。與孔夫子所說。元予所好也。今踏其地恰如接父母之國。衷心不堪喜。

閣下如此好古。欽佩之至。

予登虎邱而詣于寒山寺。低回不能去多時。寺僧贈以別詩。好意太矣。抑予不解清語。而孤獨單游。筆言之依焉。不便不可言。

閣下能略說清語。而予則全不能解貴國文字。慚愧之至。意欲於明年到貴國一遊。

如予以筆言不亦可乎。兩邦本同文。不難解也。果來遊。予任指導。必莅焉。

承蒙指導。多謝。明年必到貴國。予之兄於光緒乙未年。嘗隨弊國欽使裕庚到貴國。充橫濱領事。歸言橫濱地方之大。故予亦欲一遊。今幸得閣下介紹喜極。欽使裕庚於東京一見焉。

厚意多謝。請期再會。

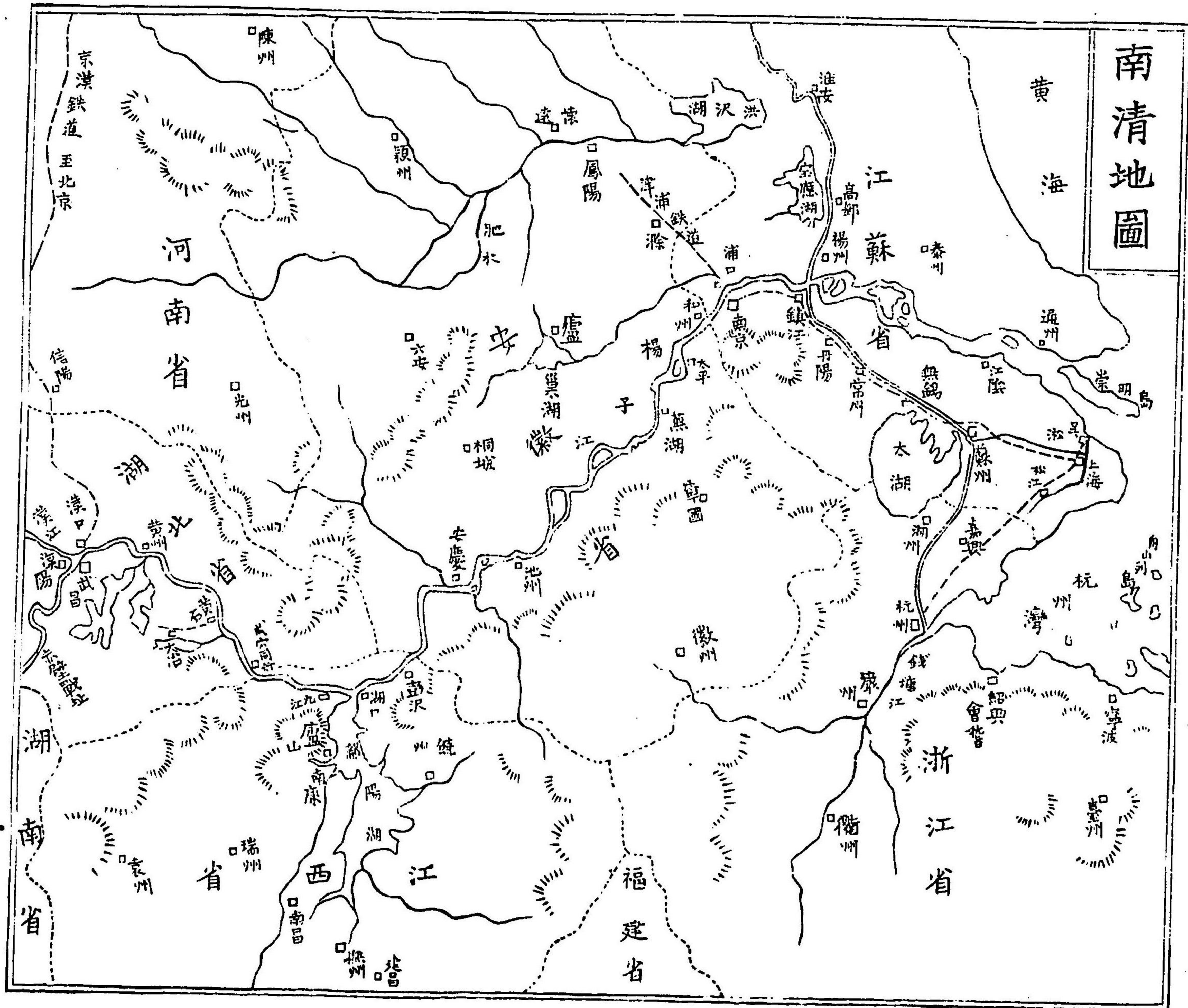
筆談は右の如くである。地名の發音は是非とも知らなくてはならぬ。これは字を書いて支那人に讀んでもらつて假名をつけて置くが宜しい。筆談に於て困るのは、支那人は鉛筆を懸腕直筆で持ち、楷書で丁寧を書くから甚だ遅い事である。蓋し支那人は多くは草書を知らぬ。又在清の日本旅館には必らず案内して呉れる番頭がある。案内料半日一弗。支那人の案内者一日一弗である。

旅費 旅費は、多く持參することが不安心と思はば、在清の日本郵便局に爲替で送つて置くべきである。然る時は支那貨に換算して渡して呉れる。予が十三日の旅行。普通の程度の旅行をして費したる金額百五六十圓であつた。汽船、汽車等先づ中等といふのであつた。

ない。日本の様に生命財産の安全なる國は世界無比であらう。併しながら支那人は國際的敵愾心など藥にしたくもない。唯外國人は金を持つて居るだらうと思つて、掠奪せんとして危害を加ふることがあるかも知れぬ。それも萬一である。若しかかる目に遇ふとしても彼は怯懦であるから多人數でなければやらぬ。故に武器など携帯しても斯る場合には無効である。萬一かかる場合に際せば快く奮闘して死なば、國際上いくらかの代價となるかも知れぬと自ら愉快に思ふのである。心配すれば限りない。先づ安全と考へてよからう。

南清紀行終

南清地圖



明治四十四年十一月廿八日印

行刷

南清紀行

奧附

定價金五拾五錢

著者

佐藤善治郎

發行者

中井眞三

東京市文橋區西側區町十六番地

印刷者

萩原勝次郎

東京市小石川區久野町百八番地

印刷所

博文館印刷所

東京市小石川區久野町百八番地

不許複製

東京市京橋區西紺屋町十六番地

電話東京一四七〇番

電話東京三三三〇番

電話東京三三三〇番

發兌元

良明堂書店

遲塚麗水著 定價七十錢

山水往來

麗水氏は現時我文壇に於ける紀行文の大家なることは世の既に知る所なり。觀察の非凡、文辭の豊富、行文の流麗他に等匹を見ず。此の書氏が會心のもの拾篇を收む。世の旅行家、愛文家速に一本を備へられんことを望む。

森鷗外 德富蘆花 諸氏感想文

小枯木

本間久著 定價一圓卅五錢 送料十二錢

森思想、舊道塵を葬り、詩人の新思想、新生活を曝露したる點痛快を極む。本書一度出づるや諸新聞は競つて是れを評價し文壇の衆目此の一書に集まりしかの感ありき。此の一事を以て見ても如何に本書が尋常凡庸の作に非ざるかを知るに足らん。

田寺覓二著 定價一圓廿錢 送料八錢

花ととば

花を研究するに科學を基礎とし、その上に文學的觀察をしたものである。文學者、藝術家、園藝家理科教師等の好參考書である。

五之洞菱沼理式著

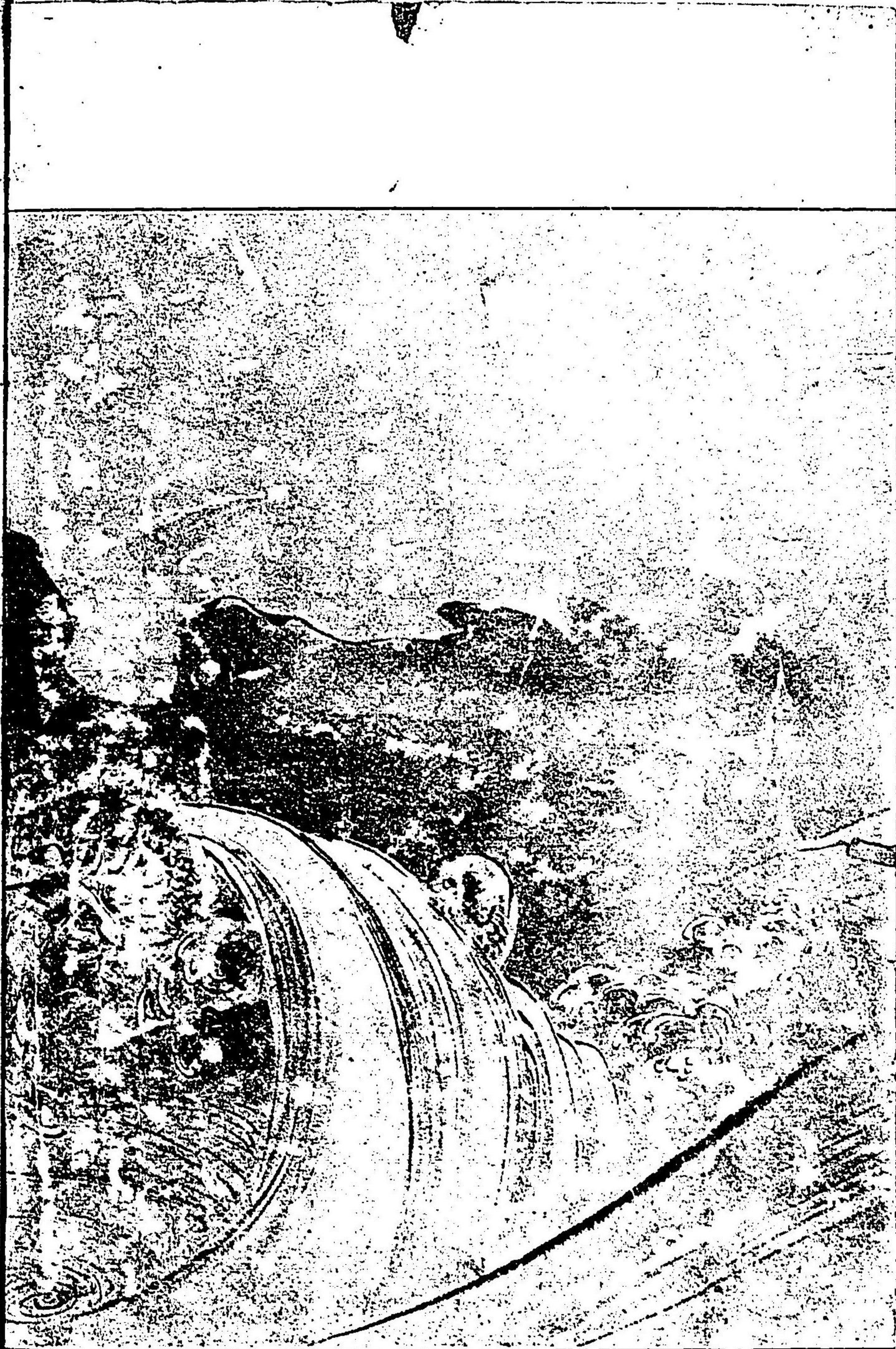
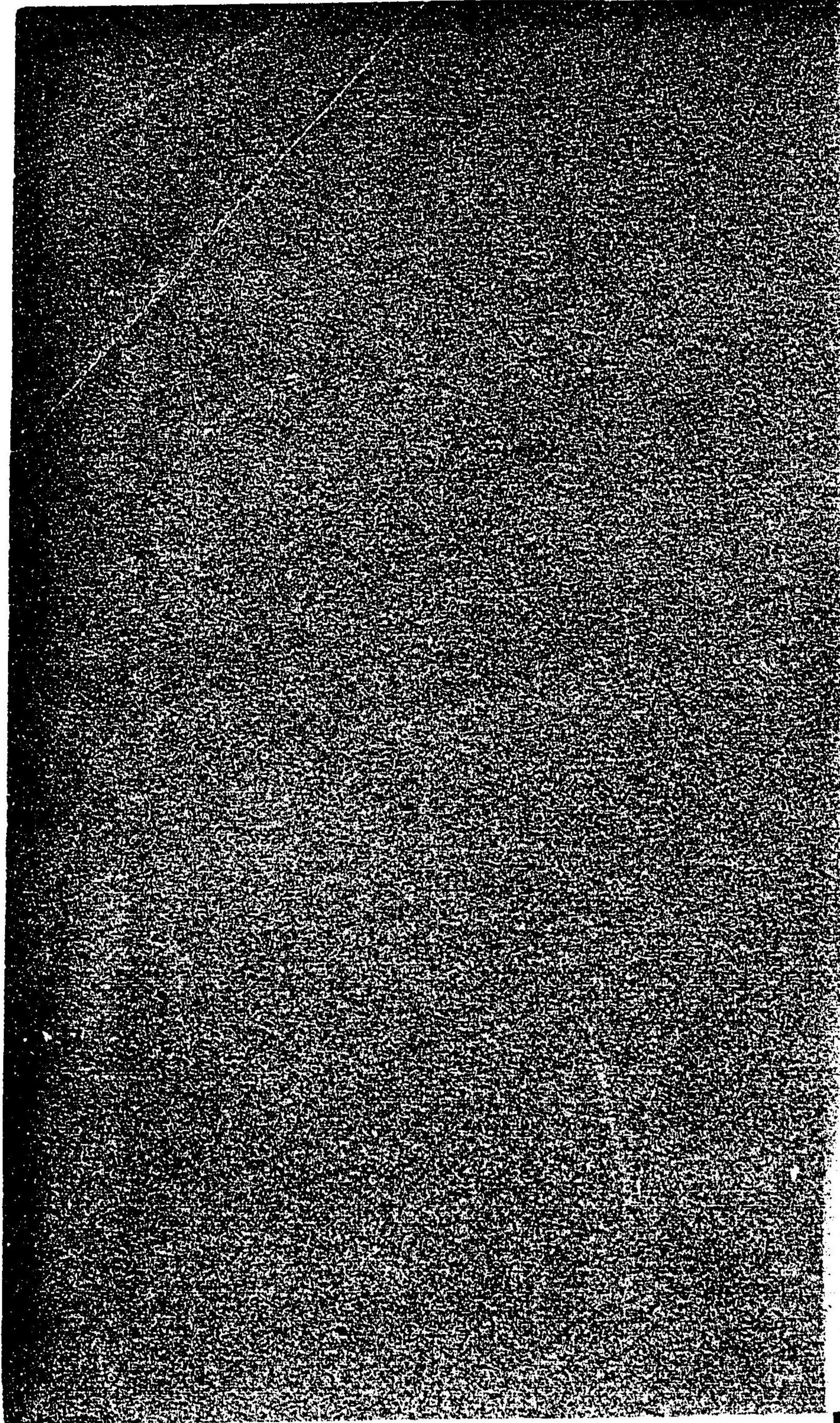
中庸啓迪 定價五十錢 送料六錢

米山喜太郎著 定價六十錢 送料六錢

法制經濟熟語釋義

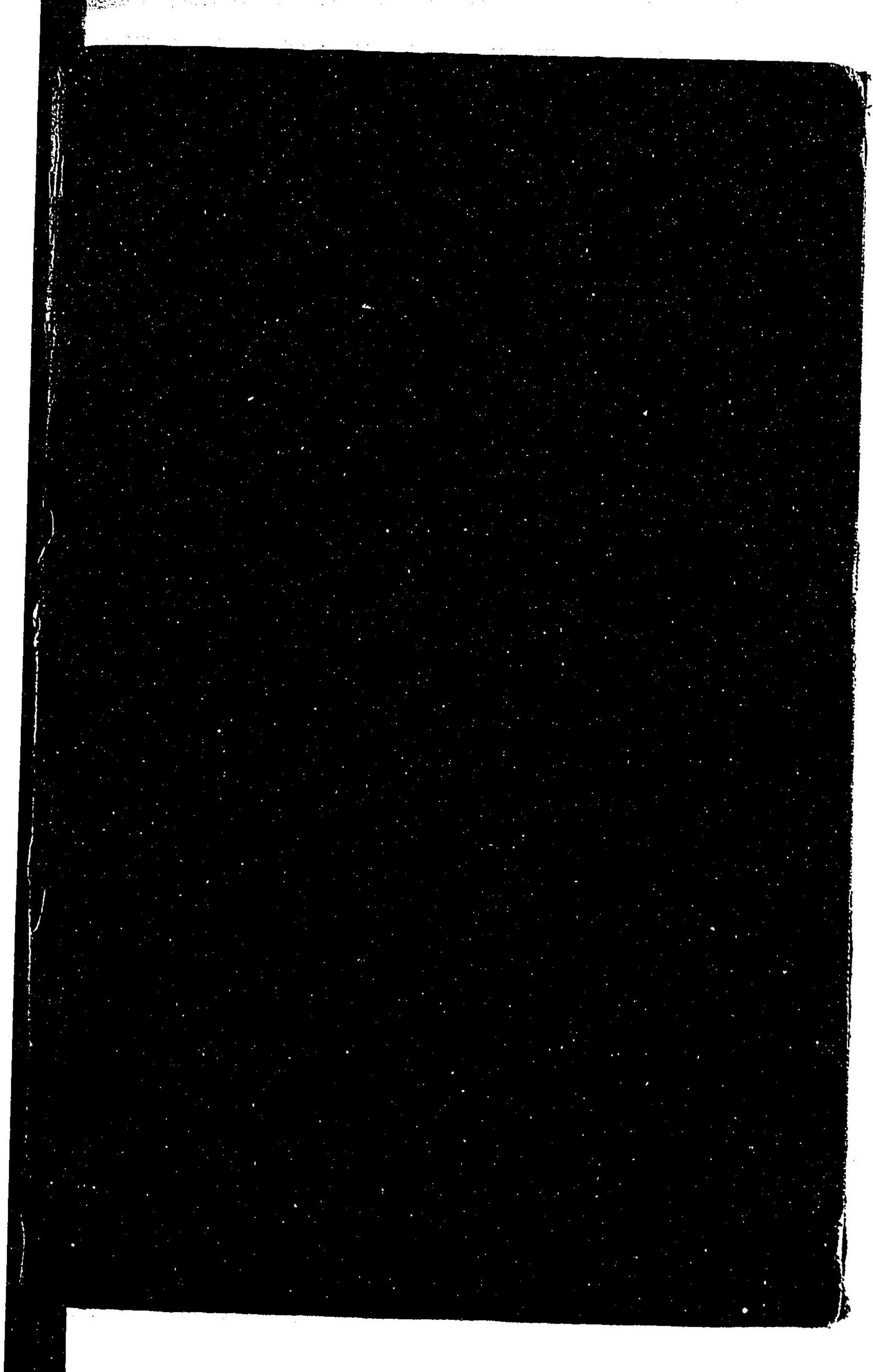
329
192

4



38 北京、京東 橋 畫 像 冊

339
192



33
192

M

026643-000-8

332-192

南清紀行

佐藤 善治郎 / 著

M44

ADD-0332

